

榎町遺跡 I

— 1・2次調査 —

大野城市文化財調査報告書
— 第94集 —

2011

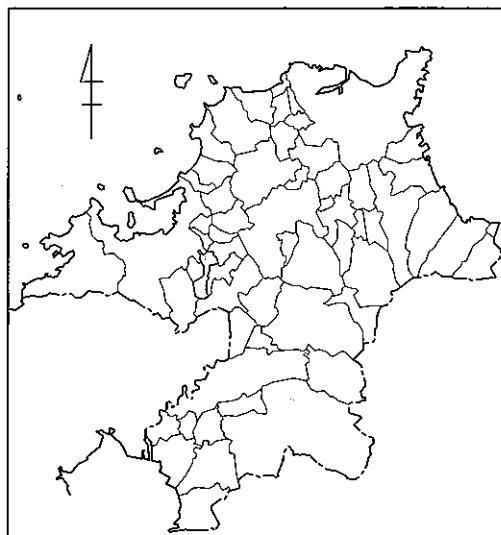
大野城市教育委員会

えのき まち
榎町遺跡 I

— 1・2次調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第94集 —



2011

大野城市教育委員会

序

大野城市は福岡平野の一角に位置し、市名の由来となった特別史跡大野城跡、同じく『日本書紀』に記された特別史跡水城跡、そして須恵器の窯跡群としては兵庫県以西の西日本で最大の規模を誇る国史跡牛頸須恵器窯跡など、数多くの文化財に恵まれた街です。

本市教育委員会では各種開発に先立って発掘調査を実施していますが、今回ご報告する榎町遺跡は市の北部にあり、試掘調査によって新たに発見された遺跡です。弥生時代の後期や奈良時代の遺構が見つかっています。調査面積は小規模ですが、今後調査を重ねることによって新たな歴史が判明してくることと考えています。

本報告書により、発掘調査の成果が広く世に知られ、さまざまな形で活用されることを願っています。

最後に、発掘調査費負担のご協力をいただきました土地所有者や、調査に対してご協力をいただいた関係各位に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成23年3月31日

大野城市教育委員会

教育長 古賀宮太

例　　言

1. 本書は、大野城市教育委員会が実施した、榎町遺跡1・2次の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、民間の事務所並びにガソリンスタンド建設に伴って実施したものである。
3. 当遺跡の報告書編集は、入札によって株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託し、執筆の一部（「I. はじめに」）を大野城市教育委員会の舟山良一が行い、検査・監修を舟山・石川健が行った。
4. 報告書作成における業務分担は、次のとおりである。
遺物実測：岡めぐみ・沖野実
デジタルトレース：藤崎伸一郎
遺物写真：大坪芳典・中田裕樹・嘉村哲也
執筆：舟山良一・大坪・嘉村
編集：大坪
5. 遺構実測図中の方位は、磁北を表す。
6. 本文中での出土遺物量の表現は、20cm×30cmのビニール袋と40cm×60.5cm×15cmの整理用コンテナを基準に換算した。
7. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土交通省国土地理院発行の25,000分の1地形図『福岡南部』・『太宰府』を使用した。
8. 遺物実測図中の断面黒塗りは須恵器で、断面斜線は石製品である。
9. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』（農林水産省農林水産技術会事務局監修）を使用した。
10. 本書の遺物・図面・写真是すべて大野城市教育委員会が管理・保管している。

本文目次

I. はじめに.....	1
II. 位置と環境.....	3
III. 調査の結果	
1. 1次調査	
1　調査概要.....	4
2　遺構と遺物.....	6
2. 2次調査	
1　調査概要.....	14
2　遺構と遺物.....	14
IV. まとめ	
1. 1次調査.....	27
2. 2次調査.....	27
3. 両調査区の溝について.....	28

表 目 次

表1～3　　榎町遺跡1次出土遺物観察表①～③.....	22～24
表4・5　　榎町遺跡2次出土遺物観察表①・②.....	25・26

図版目次

図版 1 (1) 1次調査区 完掘全景 (北東から)	
(2) 1次調査区と周辺 (北東から)	
図版 2 (1) 1次調査 SD 01 土層 (北から)	
(2) 1次調査 SD 01 遺物出土状態①	
(3) 1次調査 SD 01 遺物出土状態②	
図版 3 (1) 2次調査区 調査前全景 (南西から)	
(2) 2次調査区 全景 (西から)	
図版 4 (1) 2次調査区東半 (南から)	
(2) 2次調査区中央 (東から)	
図版 5 (1) 2次調査 SD 03 (南東から)	
(2) 2次調査 SK 01 (南西から)	

図版 6 (1) 2次調査 P 73 遺物出土状態(南から)

(2) 2次調査 P 66 (西から)

図版 7 出土遺物①

図版 8 出土遺物②

図版 9 出土遺物③

挿図目次

第 1 図	周辺遺跡分布図(1/25,000).....	2
第 2 図	榎町遺跡 1・2 次調査区位置図(1/2,500).....	4
第 3 図	榎町遺跡 1 次調査区遺構配置図 (1/100)	5
第 4 図	S D 01 溝土層実測図 (1/20)	7
第 5 図	S D 01 I 層出土遺物実測図 (1/3)	7
第 6 図	S D 01 II 層出土遺物実測図① (1/3)	9
第 7 図	S D 01 II 層出土遺物実測図② (1/3)	11
第 8 図	S D 01 II 層出土遺物実測図③ (1/6・2/3・1/3)	12
第 9 図	S K 20 出土遺物実測図 (1/3)	13
第 10 図	榎町遺跡 2 次調査区遺構配置図 (1/100)	15
第 11図	S D 03 出土遺物実測図① (1/3)	17
第 12 図	S D 03 出土遺物実測図② (1/4)	18
第 13 図	S K 01 土坑実測図 (1/40)	19
第 14 図	S K 01 出土遺物実測図 (1/3)	19
第 15 図	S K 02 土坑実測図 (1/40)	19
第 16 図	S K 02 出土遺物実測図 (1/3)	19
第 17 図	ピット出土遺物実測図 (1/3)	20

I. はじめに

榎町遺跡は 1980 年福岡県教育委員会が作成した『福岡県遺跡等分布地図』には登録されていない遺跡で、大野城市教育委員会が 1989 年（平成元年）に民間の事務所建設に先立って試掘調査を実施したところ見つかった遺跡である。この時行なった本調査を 1 次調査とする。面積は 130 m²であった。また、その後 1993 年（平成 5）10 月にガソリンスタンド建設に関連して 2 次調査を行った。面積は 350 m²であった。

整理作業は 2008 年（平成 20 年度）と 2010 年（平成 22 年度）に実施した。平成 22 年度の整理作業時の本市教育委員会の体制は以下のとおりである。

大野城市教育委員会	教育長	古賀 宮太
	教育部長	森岡 勉
	ふるさと文化財課長	舟山 良一
	文化財担当係長	中山 宏
	主査	徳本 洋一
	"	石木 秀啓
	"	丸尾 博恵
	主任技師	林 潤也
	"	早瀬 賢
	技師	上田 龍児
	嘱託	石川 健
	"	吉田 浩之
	"	渡邊 和子
	"	茂 友美
	"	国分 ゆみ
	"	早瀬 邇子
	"	境 聰子
	"	井上絵美子
	"	高野 佳子

本市教育委員会では、発掘調査を担当した技師の退職等により報告書の刊行が遅れている発掘調査成果の公表については、平成 18 年度より順番を決めて業者委託により年次的に刊行する方針で臨んでいるが、本報告書がその 5 冊目になる。本報告書の場合は出土遺物の整理作業を平成 20 年度に行い、その他の委託は平成 22 年度に行った。

なお、現地調査は 1 次調査は向直也、2 次調査は舟山が担当した。

発掘調査に際しては、調査費のご協力を得た地権者並びに関係各機関に厚く感謝の意を表します。



第1図 周辺遺跡分布図 (1/25,000)

- | | | | |
|--------------|-------------|-------------|------------|
| 1. 持田ヶ浦古墳群 | 2. 御陵古墳群 | 3. 今里不動古墳 | 4. 墓口遺跡 |
| 5. 御陵前ノ塚遺跡 | 6. 喜一田古墳群 | 7. 王城山古墳群 | 8. 古野古墳群 |
| 9. 花園遺跡 | 10. 薬師の森遺跡 | 11. 松葉園遺跡 | 12. 森園遺跡 |
| 13. 中・寺尾遺跡 | 14. ヒケシマ遺跡 | 15. 平限遺跡 | 16. ウド遺跡 |
| 17. ウド古墳 | 18. 檻町遺跡 | 19. 銀山遺跡 | 20. 原口古墳群 |
| 21. 原門遺跡 | 22. 雄子ヶ尾遺跡群 | 23. 曲目遺跡 | 24. 深町古墳 |
| 25. 金山遺跡 | 26. 金山古墳 | 27. 笹原古墳 | 28. 成屋形遺跡 |
| 29. 裏ノ田遺跡 | 30. 水城跡 | 31. 池ノ上遺跡 | 32. 向谷北遺跡 |
| 33. 九州大学構内遺跡 | 34. 池田遺跡 | 35. 官道推定ライン | 36. 御供田遺跡 |
| 37. 後原遺跡 | 38. ハザコ遺跡 | 39. 原ノ畑遺跡 | 40. 国分田遺跡 |
| 41. 瑞穂遺跡 | 42. 石勺遺跡 | 43. 村下遺跡 | 44. 雜餉限遺跡 |
| 45. 御笠の森遺跡 | 46. 川原遺跡 | 47. 仲島遺跡 | 48. 井相田遺跡群 |
| 49. 麦野遺跡群 | 50. 南八幡遺跡群 | 51. 雜餉限遺跡群 | 52. 駿河遺跡 |
| 53. 伯玄社遺跡 | 54. ナライ遺跡 | 55. 西平塚遺跡 | 56. 高辻遺跡 |
| 57. 惣利窯跡群 | 58. 唐山古墳群 | | |

II. 位置と環境

福岡県大野城市は福岡平野の東南部に位置する。市域は南北に長く、中央部がくびれた、ひょうたん型の形状である。市域の中央部は牛頸川と御笠川が合流し、その御笠川水系によってつくられた沖積平野が広がる。また、市域の東北部に四王寺山や乙金山が、南部と南西部には脊振山地の牛頸山から連なる山麓丘陵地からなり、古い歴史と自然に恵まれた緑の街である。

榎町遺跡 1 次の調査区は国道 3 号線沿いの大野城市御笠川 5 丁目 9-17、2 次の調査区は大野城市御笠川 5 丁目 9-13 に所在し、御笠川右岸の沖積平野に立地（18）している。榎町遺跡は 1・2 次調査のいずれも主に弥生時代の遺構が検出されており、2 次では古代の遺構も僅かに確認できた。

当遺跡が所在する福岡平野で代表的な弥生時代の遺跡は板付遺跡や金隈遺跡をはじめとして多数あるが、ここでは市域における弥生時代の遺跡について概観する。

弥生時代前期の遺跡は御笠川右岸の低丘陵上に多く立地しており、集落の発見例は少なく、甕棺を持つ墓地が多い。前期中頃から後葉にかけての甕棺墓がある御陵前ノ様遺跡（5）を初めとして、その東 300 m には前期後半から末までの木棺墓が出土した塚口遺跡（4）、南東 600 m に前期後半から中期の甕棺墓や住居跡等の集落が確認された中・寺尾遺跡（13）が所在する。本報告の榎町遺跡より東 500 m の銀山遺跡（19）は既に消滅しているが、前期の遺物が採集されており、集落が存在していた可能性がある。

弥生時代中期の遺跡は低丘陵上に留まらず、沖積平野にまで広がりを見せて、墓地ばかりでなく集落が形成される。御笠川右岸には中・寺尾遺跡と同一丘陵内で隣接し、かつ同一集落の可能性がある中期の甕棺墓や集落が確認されたヒケシマ遺跡（14）がある。中期中葉から末までの甕棺墓、住居跡や溝状遺構等の集落が確認された森園遺跡（12）、甕棺は確認されていないが、祭祀土坑が検出された松葉園遺跡（11）が所在する。一方、御笠川左岸では貨布が出土したこと有名な仲島遺跡（47）や村下遺跡（43）があり、弥生時代中期から後期の集落が確認された。石勺遺跡（42）は中期の集落で高床式住居の可能性がある遺構や甕棺を含む墓地が確認された。石勺遺跡の東端の御笠川左岸の河川敷からは広形銅矛の鋳型が発見されている。

弥生時代後期の集落は先述した仲島遺跡や村下遺跡の他に、墓地としては甕棺墓があったと伝えられる瑞穂遺跡（41）がある。また、石勺遺跡と御笠川を挟んで対岸にあたる本報告の榎町遺跡（18）は中期から特に後期を主体とした集落である。

弥生時代の福岡平野はその地理的な位置関係から、中国大陸や朝鮮半島からもたらされた遺物が多く出土し、さらに青銅器の製作技術も伝えられ、春日市の須玖岡本遺跡周辺ではそれらの生産遺構も見つかっている。この一帯は奴国を中心部と考えられているが、榎町遺跡は須玖岡本遺跡から東へ約 3km の距離にあり、本遺跡も奴国の影響下に入っていたものと想定される。

参考文献

大野城市史編さん委員会 2005 『大野城市史 上巻』

III. 調査の結果

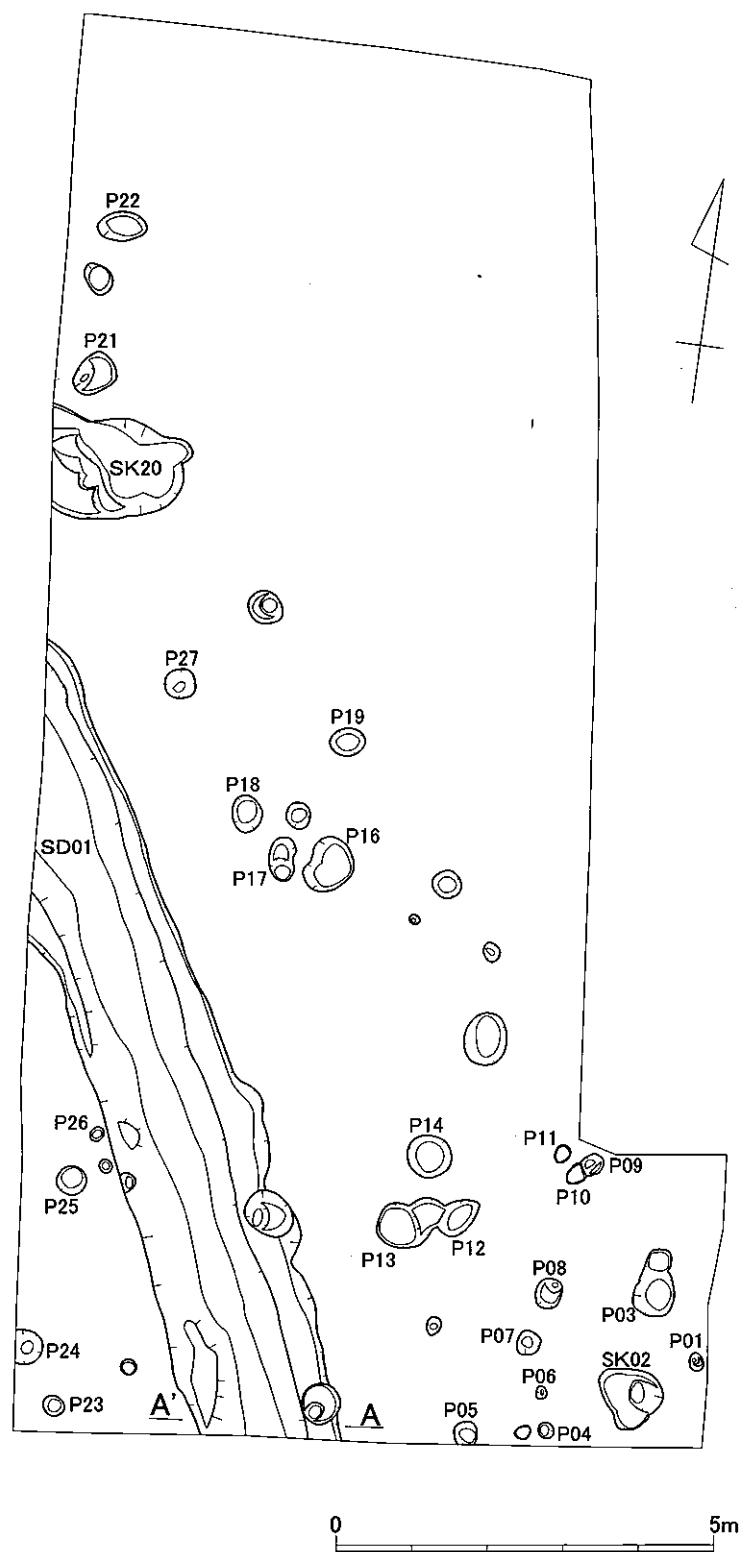
1. 1次調査

1. 調査概要（第2・3図、図版1）

榎町遺跡1次調査は大野城市御笠川5丁目9-17に所在する。調査面積は130 m²である。遺構面は現地表面から20cm程下で確認され、検出面の標高は17.3mである。調査区の基本層序は耕作土の下は遺構面であった。検出された遺構は溝1条、土坑2基、ピットである。ただし、土坑とピットの遺構番号は通し番号とした。出土遺物は整理用コンテナ18箱分で、時期は弥生時代が主体である。



第2図 榎町遺跡1・2次調査区位置図(1/2,500)



第3図 榎町遺跡1次調査区遺構配置図(1/100)

2. 遺構と遺物

(1) 溝

SD 01 溝 (第3・4図、図版2)

調査区の南西に位置し、南東から北西へ直線的に延びる溝である。溝幅は1.67～2.10mで、検出面からの深さは39.5～47cmである。溝底のレベル差は北西に9.5cm深い。溝の断面は浅い鍋底状を呈する。遺構は上層のI層と下層のII層とに大別できた。I層には弥生時代中～後期の土器(第5図)や、それ以降の須恵器まで含んでいた。II層には弥生時代中期の土器を僅かに含み、後期の遺物を主体とする(第6～8図)。また、II層の床面に石包丁が出土した。

出土遺物 (第5～8図)

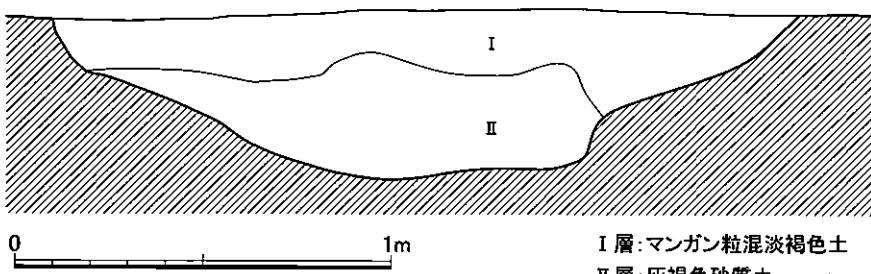
弥生土器

壺 (1・2・10～12・14) 1は口縁部がやや外反気味に伸びる。復元口径14.5cm、残存器高8.55cmである。口唇部に刻目を施し、口縁部の内外面は横ナデで、頸部の内面は横ナデを施す。肩部の外面は斜・横ハケメ後に丁寧なナデを施し、肩部内面は斜ハケメ後にナデを施す。2は頸部が緩やかに屈曲し、口縁部がやや外反する。復元口径15.5cm、残存器高9.85cmである。内外面は磨耗により、調整が不明である。10～12は複合口縁壺で、口縁部が直行もしくはやや内傾する。10は復元口径21.1cm、残存器高7.0cmである。口縁部の内外面ともに横ハケ後に横ナデを施し、外面には刻目を入れ、内面には指頭圧痕が残る。頸部内外面には斜・縦ハケメを行う。11は残存器高8.3cmである。口縁部の内外面は横ハケ後に横ナデを施し、磨耗のため不明瞭だが外面には刻目を入れる。その内面には指頭圧痕が見られる。頸部の内外面には斜ハケメを施す。また、外面には赤色顔料らしき付着物が僅かに確認できる。12は小型の壺で、復元口径11.0cm、残存器高6.7cmである。口縁部の内外面は横ハケ後にミガキを施す。頸部の外面に縦ハケ後にミガキを行い、内面に斜ハケメを施す。14は口縁部がやや外反気味に伸びる。復元口径14.4cm、残存器高7.3cmである。外面は磨耗しており、口縁部の内面は縦ハケ後に横ナデを施し、肩部の内面は指頭圧痕が見られ、ナデを施す。

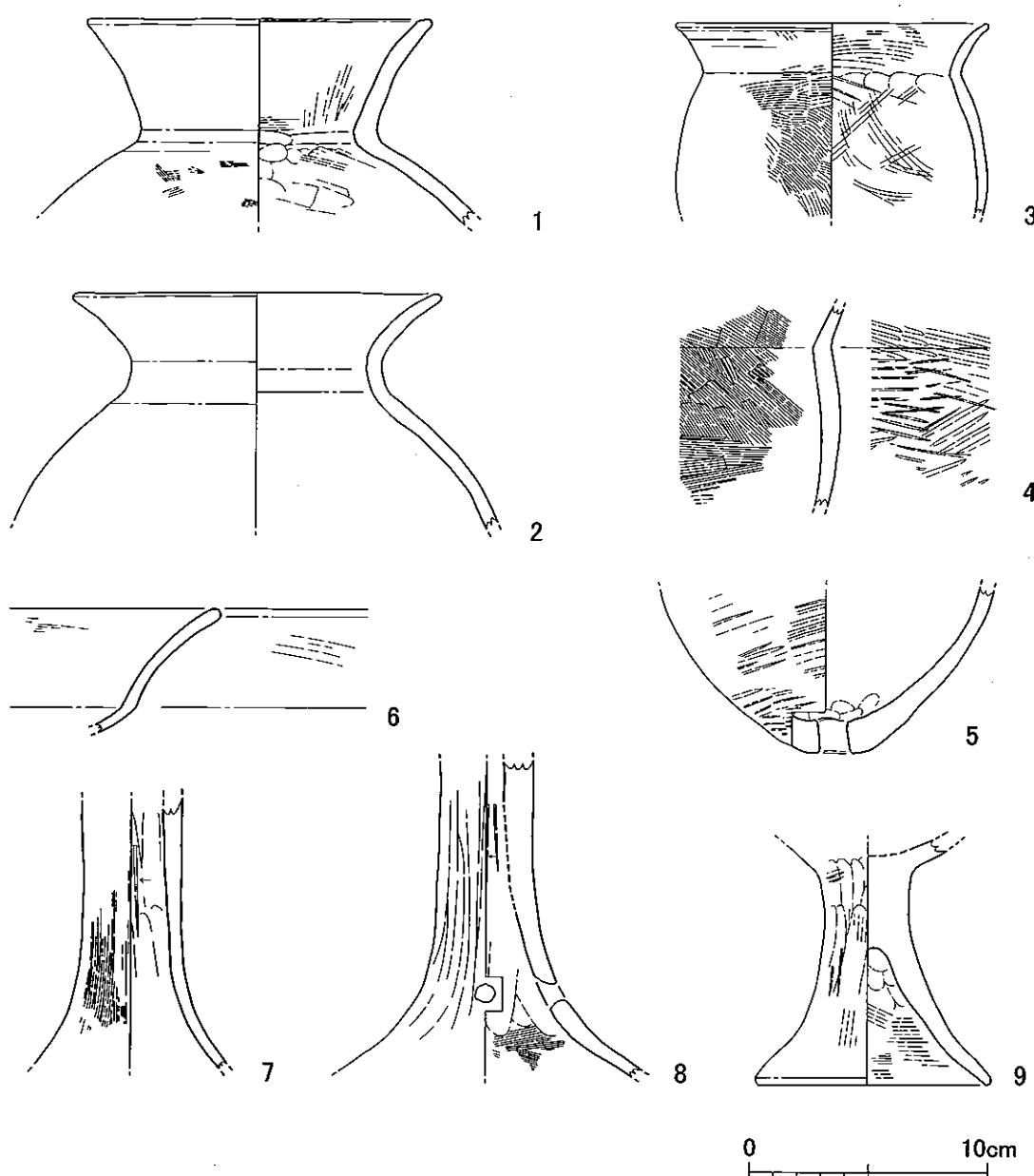
甕 (3・4・17～30) 3は口縁部がやや外反する。復元口径13.1cm、残存器高8.0cm、復元胴部最大径9.2cmである。口縁部の外面は縦ハケ後に横ナデで、内面は横ハケメである。胴部の外面は斜・横ハケメを施し、内面は斜めハケメ後にナデを施す。外面には煤が付着する。4は口縁部が僅かに「く」字状に屈曲し、胴部の張りが弱い。残存器高8.4cmである。外面はタタキを施し、内面は斜ハケメで、下位に横ハケを施す。黒班が見られる。17は鋤形口縁で、残存器高4.4cmである。内外面はナデで、内面に成形時の指頭圧痕が見られる。18は跳ね上げ気味の口縁で、丹塗土器である。復元口径34.8cm、残存器高9.7cmである。口縁部の内外面は横ハケ後に横ナデを施し、胴部の内外面は縦ナデと斜ハケメが見られる。19は残存器高6.3cmで、頸部に斜格子に刻む突帯が付く。外面に斜ハケメ、口縁部の内面に横ハケメを施し、胴部の内面に斜ハケメを施す。20は口縁部が「く」字状に屈曲し、やや外反する丹塗土器である。復元口径24.0cm、残存器高5.45cmである。口唇部は面取りし、口縁部の内外面はハケメ後にナデを施す。胴部の外面に縦ハケ後ナデを施し、内面に縦ハケメ後板ナデを施す。21は口縁部が「く」字状に屈曲し、胴部上端に突帯を有

A

H:17.50m A'



第4図 SD 01 溝土層実測図 (1/20)

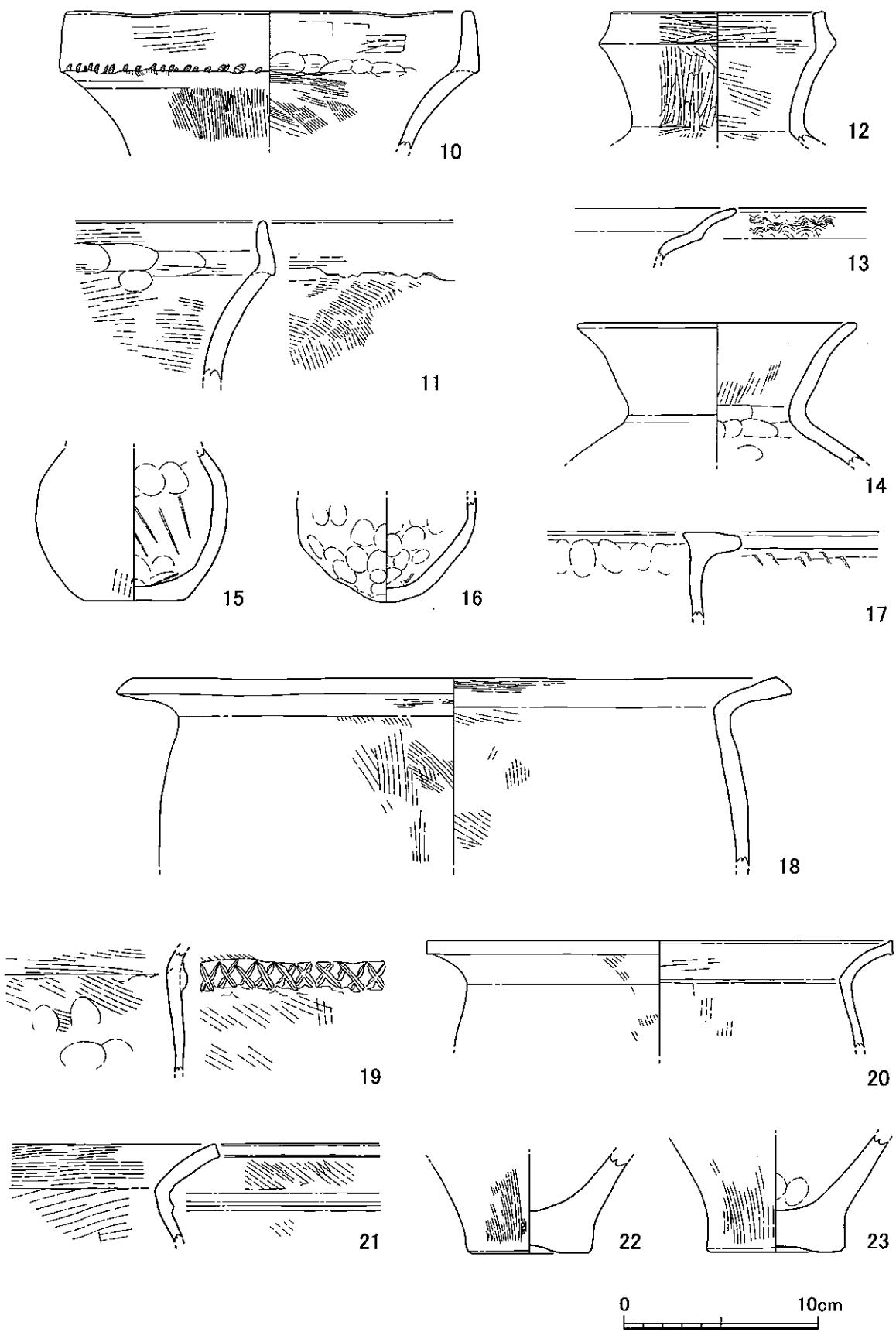


第5図 SD 01 I 層出土遺物実測図 (1/3)

する。口唇部は面取りし、口縁部の外面は斜ハケメ後にナデを施し、内面は横ハケメ後にナデを施す。胴部の外面は縦ハケメ後にナデを施し、内面は斜ハケメ後に板ナデを施す。22・23は上げ底の底部であり、外面は縦ハケメで、内面は磨耗している。22は残存器高5.1cm、底径6.4cmである。23は残存器高6.0cm、底径7.1cmであり、底部内面に僅かに指頭圧痕が見られる。24は口縁部が「く」字状に屈曲し、直線的に外傾する。復元口径16.2cm、残存器高10.6cm、復元胴部最大径14.9cmである。口縁部の内外面は横ナデであり、胴部の外面は粗い縦ハケメで、その内面は斜ハケメである。黒班が見られる。25・26は口縁部が緩やかに屈曲し、口縁部はやや外反する。25は残存器高7.6cmで、口縁部の内外面は横ナデであり、胴部の外面は縦ハケで、その内面は斜ハケメである。26は復元口径12.2cmで、残存器高4.95cmである。口縁部の内外面は横ナデであり、肩部の外面は磨耗し、その内面はナデ後に斜・横ハケメである。27は平底もしくは凸レンズ状の平底である。残存器高4.0cm、底径8.3cmである。底部付近の内外面は磨耗が著しい。底面は不定方向ハケメを施し、煤が付着する。28は口縁部が「く」字状に屈曲し、やや外反気味であるが直線的に外傾する。残存器高は3.65cmである。磨耗により不明瞭だが、口縁部の外面は横ハケメで、肩部の外面は縦ハケメであろう。29は小さく突出した平底の底部である。残存器高3.4cm、復元底径3.2cmである。外面はタタキを施し、内面は縦・斜ハケメを施す。30は丸底の底部である。残存器高8.2cmである。外面は粗く縦に板ナデを施し、内面は粗く斜・縦に板ナデを施す。

鉢 (35～38) 35は脚台付の丸底鉢で、口縁部が「く」字状に屈曲し、外反する。復元口径17.95cm、復元脚裾部径12.1cm、器高16.85cmである。体部の内外面は磨耗により調整は不明で、体部外面に黒斑が見られる。脚部の外面は縦ハケメを施し、脚部の内面は横方向のナデを施す。脚裾部の内外面には横ナデを施す。36は口縁部が短く、「く」字状に屈曲する。残存器高5.3cmである。外面はミガキを施す。口縁部の内面はミガキを施し、体部の内面は粗い横ハケ後にミガキを施す。37は口縁部が「く」字状に屈曲し、外反する。残存器高4.7cmである。内外面ともに磨耗により調整は不明である。38は半球形を呈し、丸底である。復元口径16.6cm、残存器高6.4cmである。内外面ともに磨耗により調整は不明である。

高杯 (6～9・13・39～41) 6は杯部の上半部が長く、反転気味に外湾する。残存器高5.2cmである。内外面ともに磨耗により調整が不明で、外面の上部に黒斑が見られる。7は緩やかに広がる脚部である。脚柱部径4.2cm、残存器高11.25cmである。外面は縦ハケメを施し、内面は縦方向のナデ後に横方向の板ナデを巡らせる。8は細く直線的な脚柱部より脚裾部に向かい急に広がり、3方向に穿孔を施す。脚柱部径3.9cm、残存器高13.2cmである。外面は縦方向のナデを施す。内面の脚柱部には横方向のナデを巡らせ、内面の脚裾部には横ハケメと縦方向のナデを施す。9は杯部との接合部より序々に広がる脚部である。復元脚裾部径は9.9cm、残存器高は10.2cmである。杯部の内面は磨耗により調整は不明である。脚部の外面は縦ハケメ後に縦方向のナデを施し、脚部の内面にはナデと横ハケメを施し、指頭圧痕が見られる。13は口縁部が強く外湾する。残存器高2.7cmである。外面には僅かに波状文が見られるが、内外面ともに磨耗により調整は不明である。39は杯部の上半が直立気味に立ち上がる。復元口径33.0cm、残存器高5.3cmである。口縁部の内外面に縦ハケメ後に横ナデを施す。杯部の外面は斜ハケメ後にナデを施し、杯部の内面は縦ハケメ後に



第6図 SD 01 II層出土遺物実測図① (1/3)

ナデを施す。40は緩やかに内湾しながら口縁部へと立ち上がる。残存器高4.6cmである。外面は杯部との接合部に補強のための刻み状の痕跡が見られるが、磨耗により調整は不明である。内面は放射状のハケメを施す。41は杯部との接合部より序々に広がる脚部を持つ。脚裾部径9.9cm、残存器高10.5cmである。外面は丁寧なナデを施す。杯部の内面は放射状のハケメ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。脚部の内面は横ハケメとナデを施す。

蓋(33・34) 33は蓋のつまみ部である。つまみ部径2.3cm、残存器高2.6cmである。天井部はハケメを施し、指頭圧痕が見られる。外面はナデを施し、内面は磨耗により調整は不明である。34は蓋の端部である。残存器高は3.2cmである。内外面ともに磨耗により調整は不明である。

器台(42) 42は屈曲部が上端付近にあり、口縁部は外反する。復元口径16.6cm、残存器高13.3cmである。口縁部の内外面に横ナデを施す。体部の外面は縦ハケメを施す。体部の内面には板ナデ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。

脚(43) 43は裾部にかけて内湾する。復元底径12.4cm、残存器高7.85cmである。外面はナデを施す。内面は板ナデと縦・斜ハケメを施し、指頭圧痕が見られる。脚裾部の内外面には横ナデを施す。

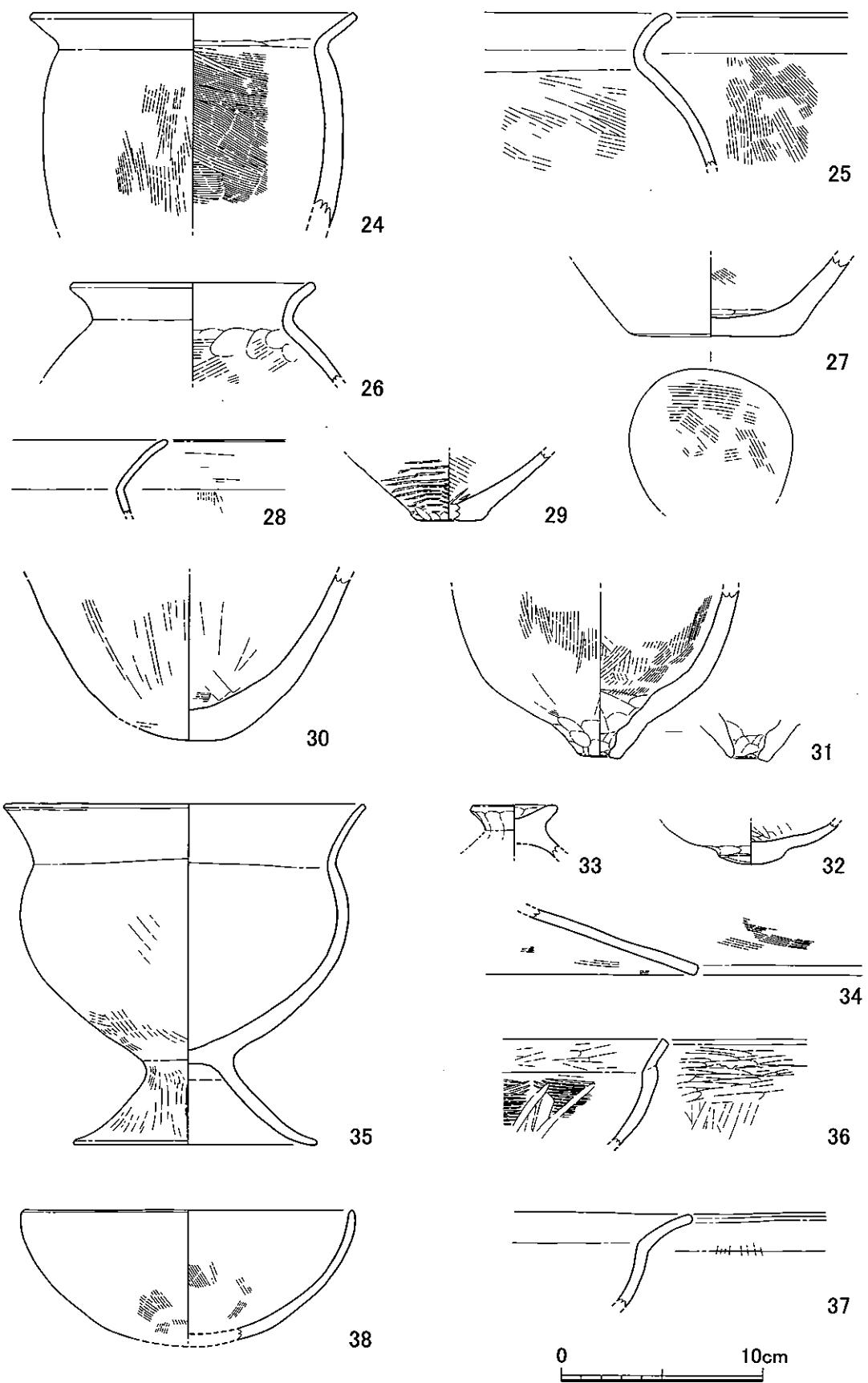
底部(5・31・32) 5・31は穿孔土器である。5は丸底の底部で、焼成前穿孔を施す。残存器高6.95cmで、穿孔径1.3cmである。外面にタタキを、内面にナデを施す。外面に黒班が見られる。31は丸底で中央のみ突出しており、その突出部に焼成前穿孔を施す。穿孔を施した突出部のみナデを施し、それ以外の底部は内外面に縦ハケメを施す。黒班が見られる。32は壺か鉢の可能性がある底部で、丸底に小さく突出したレンズ状底が付く。残存器高2.1cmである。外面はナデを施し、内面は板ナデを施す。

手づくね土器(15・16・44) 15・16は手づくね土器の壺である。15は肩部から底部にかけて丸味を帯び、底部は平底である。残存器高7.8cm、胴部最大径9.8cm、底径5.2cmである。外面は磨耗しており、内面はケズリ状の板ナデ後にナデを施す。肩部の内面には指頭圧痕が見られる。16は尖り気味の丸底である。残存器高5.35cm、復元胴部最大径9.2cmである。底部の内外面は指頭圧痕や縦方向に指ナデが見られる。黒班が見られる。44は壺の底部で、平底である。底径2.8cm、残存器高3.0cmである。外面は斜ハケメを施し、指頭圧痕が見られる。内面はナデを施し、指頭圧痕が見られる。

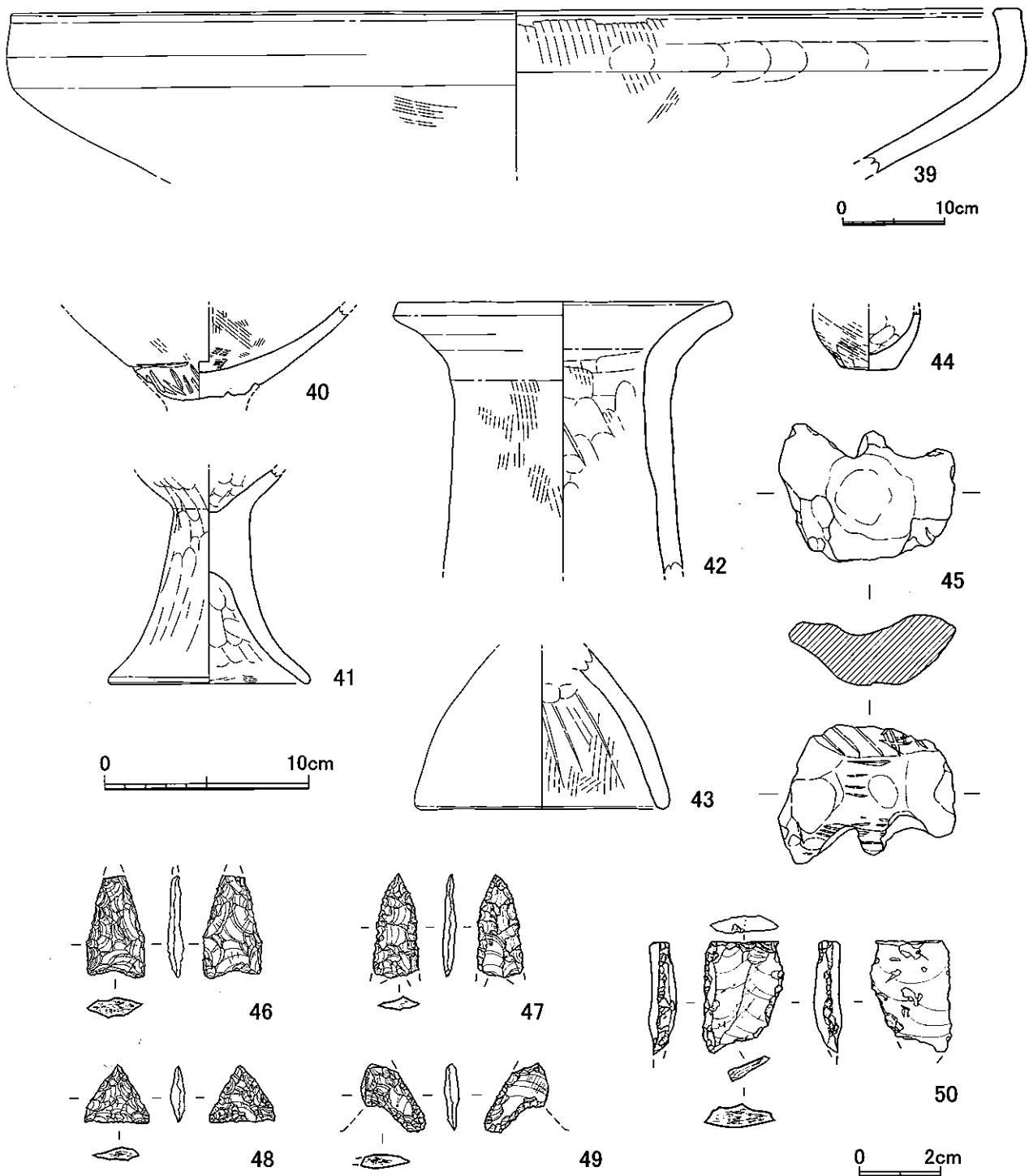
不明土製品(45) 45は不明土製品である。残存長8.6cm、残存幅6.8cm、残存高3.8cmである。焼成前の穿孔が2箇所見られ、半円状に残存する。また、刻み状の工具痕は2次的な転用品の可能性がある。

石器

石鏸(46～49) 46～49は打製石鏸である。46は安山岩製で基部の抉入が浅い二等辺三角形状であり、先端部が欠損している。残存長2.5cm、幅1.4cm、厚さ0.4cm、重さ1.34gである。47は腰岳産の黒曜石製で二等辺三角形状であり、脚部が欠損しているため基部の抉入の深さは分からない。残存長2.5cm、幅1.1cm、厚さ0.3cm、重さ0.78gである。48は腰岳産の黒曜石製で基部が平坦な正三角形状である。長さ1.4cm、幅1.5cm、厚さ0.3cm、重さ0.59gである。49は腰岳産の黒曜石製で基部の抉入が深い二等辺三角形状である。先端部及び左脚部が欠損している。残存長



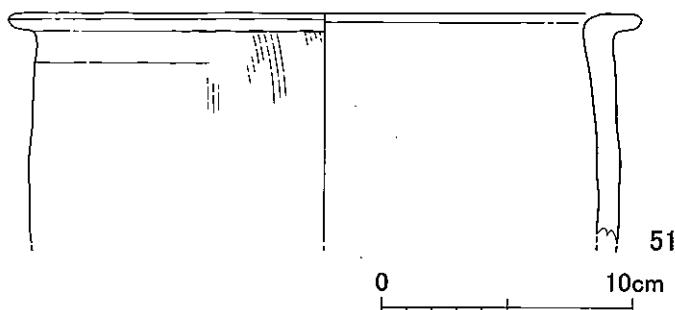
第7図 SD 01 II層出土遺物実測図② (1/3)



第8図 SD 01 II層出土遺物実測図③ (39:1/6, 46～50:2/3, その他 1/3)

1.7cm、残存幅 1.6cm、厚さ 0.35cm、重さ 0.58 g である。

スクレイパー (50) 50 は腰岳産の黒曜石製で両側面に加工を施し、サイドスクレイパーの可能性がある。端部が欠損している。残存長 2.7cm、幅 1.9cm、厚さ 0.7cm、重さ 4.35 g である。



第9図 SK 20出土遺物実測図 (1/3)

(2) 土坑

SK 20 土坑 (第3図)

調査区の西に位置する不定形の土坑である。規模は 133 cm × 残存長 186 cm、深さ 9.5 cm である。

出土遺物は弥生土器の甕 (第9図 51) や器台である。

出土遺物 (第9図)

弥生土器

甕 (51) 51 の口縁部は逆「L」字形で、胴部はやや張る。復元口径 25.2 cm、残存器高 9.15 cm である。内外面ともに磨耗が著しく、口縁部は横ナデで、胴部外面は縦ハケメである。

2. 2次調査

1. 調査概要（第2・10図、図版5）

榎町遺跡2次調査は大野城市御笠川5丁目9-17に所在する。調査面積は350m²である。検出された遺構は溝3条、土坑5基、ピットである。出土遺物は整理用コンテナ13箱分で、時期は弥生時代が主体で、古代の土坑が1基確認できた。

2. 遺構と遺物

(1) 溝

SD 03溝（第10図、図版3・4）

調査区の北東に位置し、南東から北西へ直線的に延びる溝である。溝幅は残存する幅は216cmで、検出面からの深さは0.44～0.65mである。確認できた範囲が狭いため、溝底のレベル差は明確でない。1次調査のSD 01との関係から、恐らく北西に深いと思われる。出土遺物は弥生時代の土器や石器が占める。

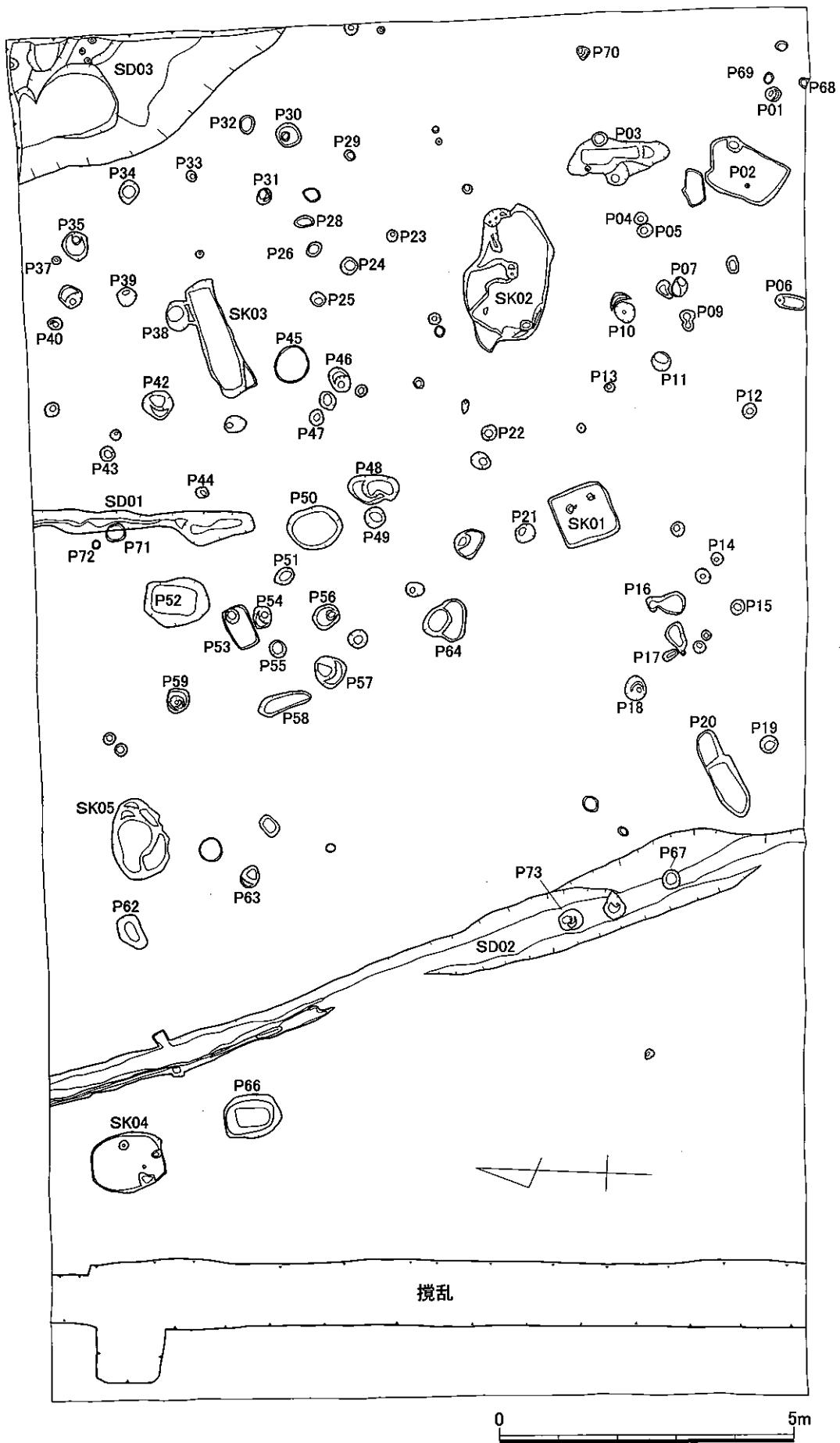
出土遺物（第11図）

弥生土器

壺（52～55）52～54は複合口縁壺で、口縁部の外側にやや稜が付く。52は復元口径22.1cm、残存器高6.0cmである。口縁部の内外面に横ナデを施す。頸部の外面は横ハケ目を施し、内面は横ハケメを施した後にナデを施す。53は残存器高5.55cmである。口縁部の内外面に横ナデを施す。頸部の外面に斜・縦ハケメを施し、内面は磨耗により調整が不明である。54は復元口径13.3cm、残存器高6.1cmである。口縁部の内外面に横ナデを施す。頸部の外面にナデを施し、内面には指頭圧痕が見られ、横ハケメを施した後にナデを施す。55は口縁部が直線的に外傾する小型の丸底壺である。復元推定口径7.7cm、残存器高7.6cm、胴部最大径9.3cmである。外面にはミガキを施し、底部付近に黒斑が見られる。口縁部内面に横ナデを施し、胴部から底部の内面にかけては放射状のハケメを施した後に丁寧なナデを施す。

壺（56）56は口縁部が「く」字状に屈曲し、直線的に外へ開く。復元口径20.8cm、残存器高5.65cmである。口縁部の外面は横ハケメ後に縦ハケメを施し、さらに横ナデを施す。その内面は横ハケメ後に横ナデを施す。口縁端部の内外面にわたって黒斑が見られる。肩部の外面には縦ハケメを、内面には斜めハケメを施す。口縁部の外面に赤色顔料が付着する。

高杯（59～63）59は杯部の上半部が短く直線的に外反し、下半部はやや丸みを帯びる。復元口径24.8cm、残存器高6.3cmである。外面は斜めハケメ後にミガキを施す。口縁端部の外面は磨耗により調整が不明である。内面は斜・横ハケメ後にミガキを施す。60は杯部の上半部が長く直線的に外傾し、下半部はやや丸味を持つ。残存器高は6.75cmである。口縁部は内外面ともに磨耗により調整が不明である。外面は斜・横ハケメ後にナデを施し、さらにミガキを施す。杯部の内面は斜ハケメ後に、ナデを施し、さらにミガキを施す。底部の内面に縦ハケメ後にミガキを施す。61は杯部がやや丸みを持ち、脚裾部にかけてやや外反する。残存器高は10.0cmである。杯部の外面



第10図 横町遺跡2次調査区遺構配置図 (1/100)

は縦ハケメ後に粗いミガキを施し、内面は不定方向のハケメ後に粗いミガキを施す。脚部の外面は縦ハケメを施し、脚部の内面はケズリ状の断続的な板ナデを施す。62は脚部が裾部に向けて強く開き、2方向に孔径1.0～1.1cmの穿孔を施す。復元脚裾部径が12.8cm、残存器高が11.0cmである。杯部との接合部に接合補強のために刻みを入れる。内面磨耗により調整は不明である。脚部外面は縦ハケメ後にナデを施し、内面はケズリ状の板ナデ後にナデを施す。脚裾部の内面は斜ハケメを施す。63は杯部の上半部が長くやや外反し、下半部は直線的である。杯部中位の外面に丹塗りの突帯がタガ状に巡る。復元口径が21.1cm、残存器高が7.2cmである。口縁端部の外面は横ナデを施す。杯部から脚部外面には縦ハケメ後にミガキを施し、脚部の内面には指頭圧痕が見られ、横ハケメ後にミガキを施す。

鉢 (58・69) 58は口縁部が内湾しながら長く伸びる浅鉢と思われる。復元口径が22.7cm、残存器高7.15cmである。口縁部の内外面は縦ハケメ後に横ナデを施す。体部の外面は縦・斜めハケメ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。体部の内面は縦ハケメを施す。69は鉢で、口縁部が外反し、底部は丸底である。復元口径が8.8cm、復元底径4.2cm、器高4.3cmである。外面は縦ハケメを施し、赤色顔料が付着する。内面は横・斜ハケメを施す。

手づくね土器 (67・68) 67・68は手づくね土器の鉢である。67は丸みを帯び、底部は平坦である。復元口径は3.7cm、器高4.65cmである。内外面ともにナデを施し、指頭圧痕が見られる。68は半球形の小型の土器である。復元口径が7.3cm、器高3.4cmである。外面はナデを施し、指頭圧痕が見られる。内面は板ナデ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。外面に黒斑が見られる。

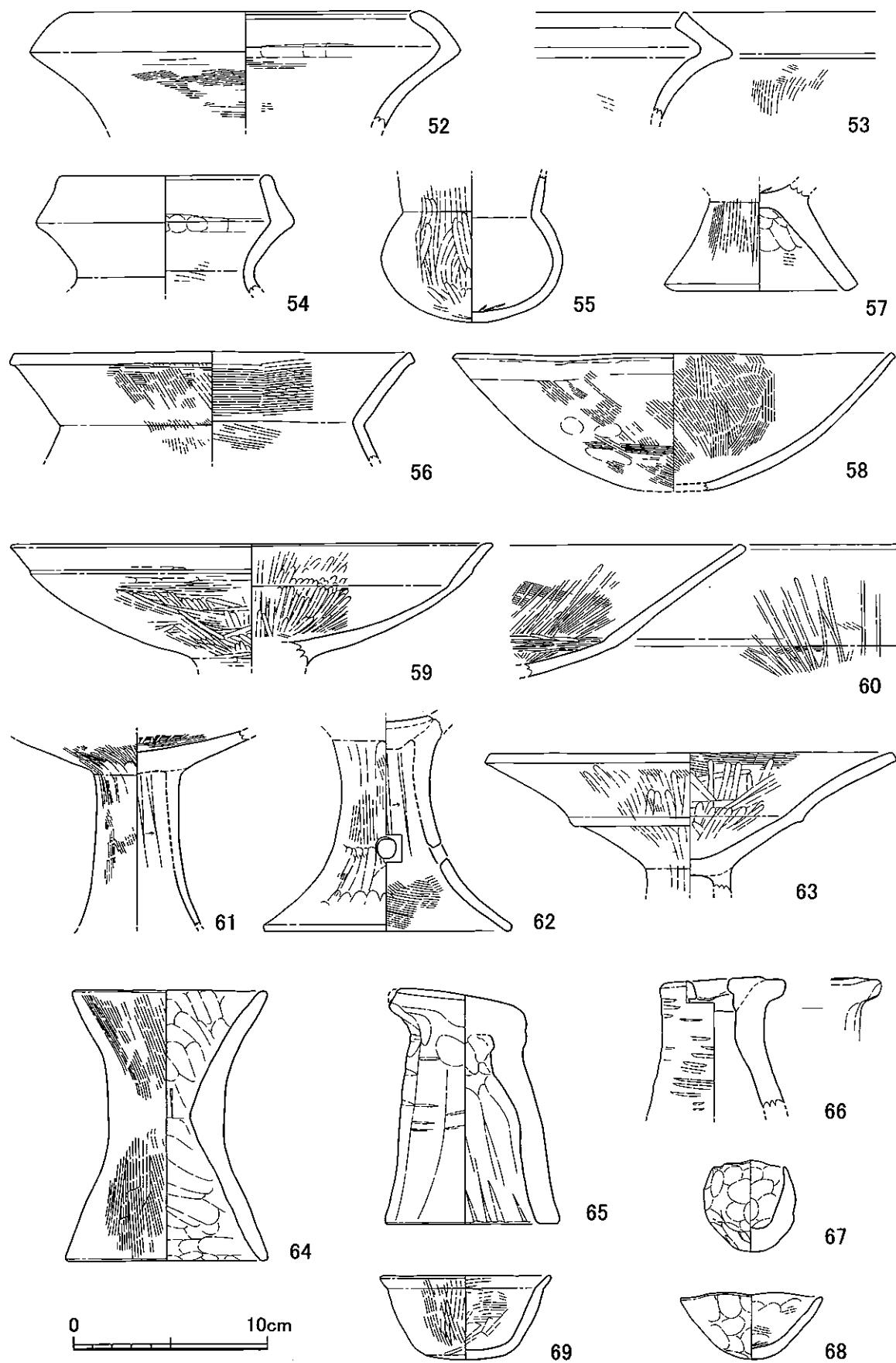
器台 (64～66) 64は口縁部径と裾部径がほぼ同じものである。口径が10.05cm、復元底径が10.4cm、器高が13.9cmである。外面は縦ハケメを施し、内面は板ナデ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。65・66はいわゆる沓形器台である。65は裾部にかけてやや広がる。突出部を含む上面の幅が6.9cm、復元底径9.0cm、器高が12.1cmである。体部の外面はタタキ後に板ナデを施し、上面及び突出部にはナデを施し、指頭圧痕が見られる。内面は粗いナデを施す。66は裾部にかけて強く広がる。突出部を含む上面の幅が6.5cm、残存器高が7.1cmである。上面から体部にかけて黒斑が見られる。上面は磨耗により調整が不明であるが、中央に穿孔を施す。体部の外面はタタキを施す。突出部の外面はナデを施し、指頭圧痕が見られる。内面は磨耗により調整が不明である。

脚 (57) 57は小型台付鉢の脚台の可能性がある。裾部にかけてやや外反する。復元底径が10.0cm、残存器高が5.45cmである。脚部の外面は縦ハケメを施し、黒斑が見られる。裾部の外面は磨耗により調整が不明である。脚部の内面はハケメ後にナデを施し、指頭圧痕が見られる。

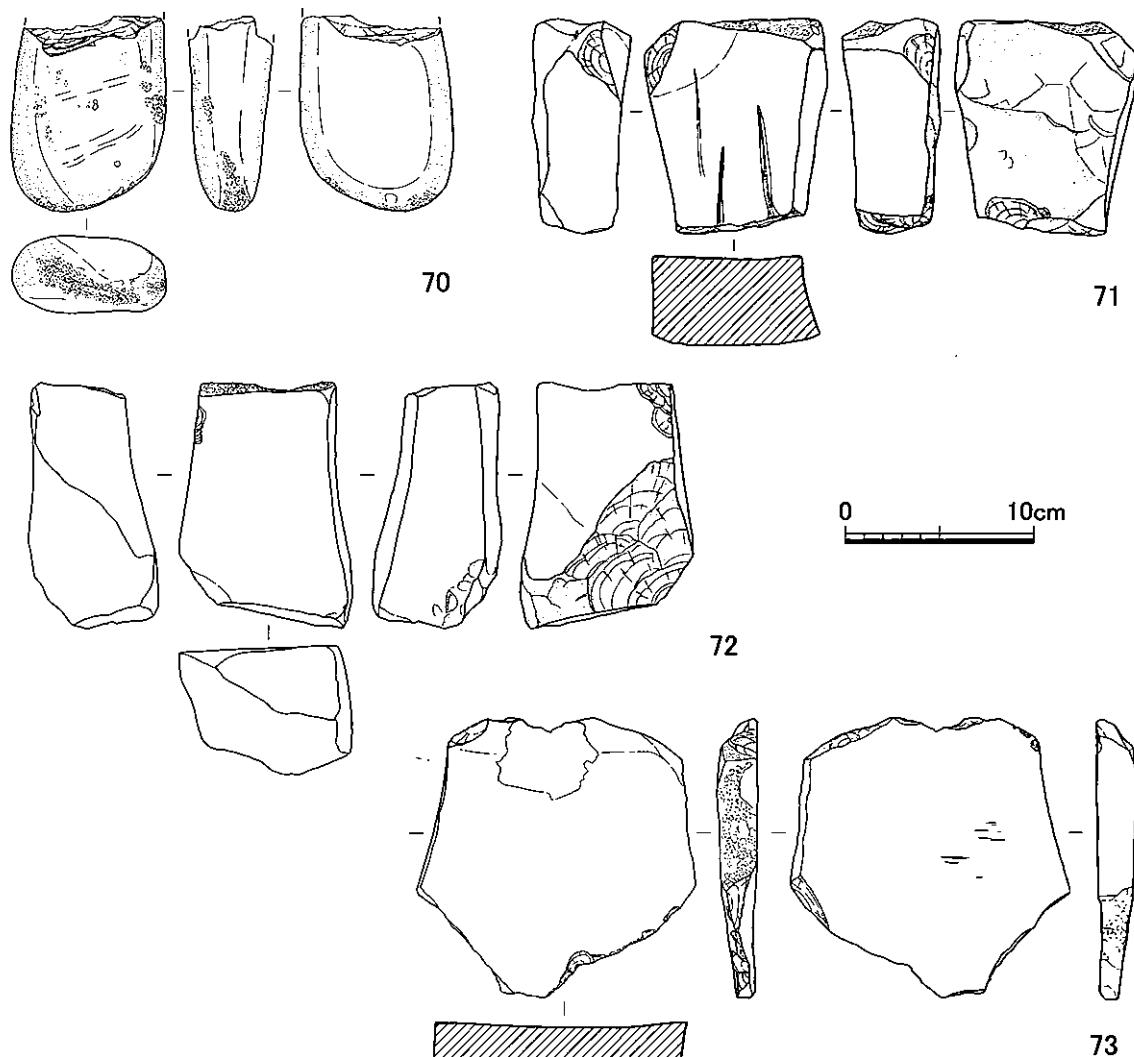
石器

磨石 (70) 70は玄武岩製の磨石である。長さ10.4cm、幅8.2cm、厚さ4.1cm、重さ605.32gである。表面の中央部と側面部に使用痕が見られ、下面に敲打痕が見られることから敲石としても使われている。断面が厚く、その形状から石斧製作中の失敗品の転用の可能性も考えられる。

砥石 (71～73) 71～73は砂岩製の砥石であり、71・72は粗砥ぎ用である。71は長さ11.4cm、幅9.7cm、厚さ5.3cm、重さ756.07gである。表面と両側面の3面が砥石面として使用されており、表面には鋭利な刃物を砥いだ痕跡が見られる。72は長さ13.1cm、幅9.3cm、厚さ6.9cm、重さ



第 11 図 SD 03 出土遺物実測図① (1/3)



第12図 SD 03出土遺物実測図②(1/4)

910.19 gである。表・裏面、両側面、上面の5面が砥石面として使用されている。73は仕上げ砥ぎ用の砥石であり、長さ14.8cm、幅14.9cm、厚さ2.2cm、重さ628.27 gである。表・裏面と、側面1ヶ所の3面が砥石面として使用されている。

(2) 土坑

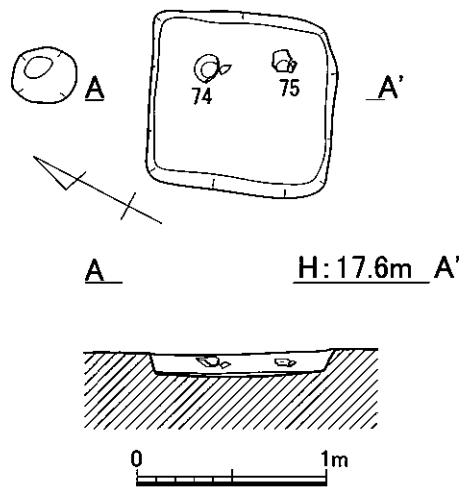
SK 01 土坑 (第13図、図版5)

調査区の中央に位置する方形の土坑である。規模は 1.00×0.96 m、深さ6.5～13.5cmである。遺構の北側には規模が 34×32 cmで深さ14～16cmのP 21ピットがある。須恵器の杯身(第14図74)と土師器の杯(第14図75)が床面からやや浮いた状態で出土した。

出土遺物 (第14図)

須恵器

杯身(74) 74は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、底部は平底である。口径13.3cm、底径8.6cm、器高3.95cmである。内外面に回転ナデを施す。底部の外面は回転ヘラ切り後にナデを施す。



第13図 SK 01 土坑実測図 (1/40)

見込みには回転ナデ後に横ナデを施す。

土師器

杯 (75) 75は体部から口縁部にかけて直線的に外傾し、底部は平底である。復元口径 15.7cm、復元底径 9.7cm、残存器高 5.25cm である。内外面ともに磨耗により調整が不明である。

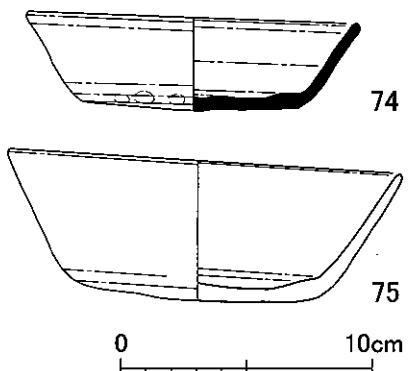
SK 02 土坑 (第15図)

調査区の西側に位置する不定形の土坑である。規模は 2.55×1.20 m、深さ 4 ~ 11cm である。遺構の中央には規模が 29×20 cm で深さ 35 ~ 36 cm のピットがあり、遺構の西隅には規模が 22×16 cm で深さ 5 ~ 10.5 cm のピットがある。遺構からは須恵器の杯蓋 (76) と杯身 (77) が出土した。

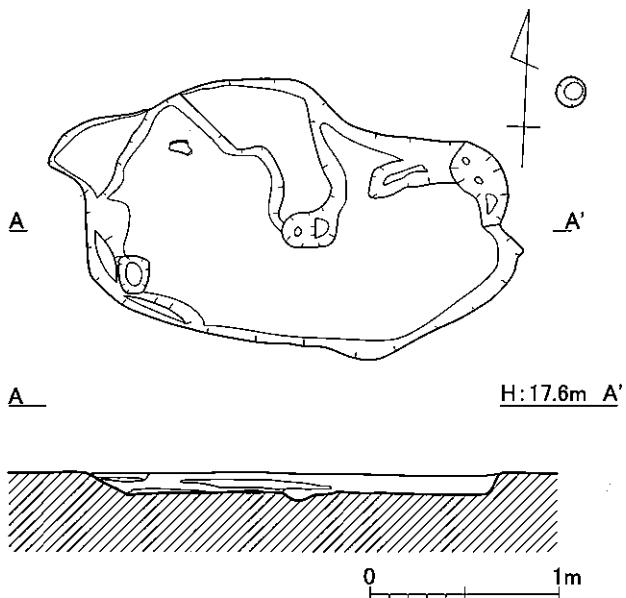
出土遺物 (第16図)

須恵器

杯蓋 (76) 76は天井部が浅く、つまみが欠損している。復元口径 18.0cm、残存器高 2.05cm である。外面は回転ナデ後に回転ヘラケズリを施し、さらに、つまみを貼り付ける際に回転ナデ



第14図 SK 01 出土遺物実測図 (1/3)



第15図 SK 02 土坑実測図 (1/40)



第16図 SK 02 出土遺物実測図 (1/3)

を施す。内面は回転ナデ後に横方向のナデを施す。

杯身(77) 77は高台を持ち、復元高台径11.0cm、残存器高1.8cmである。内外面に回転ナデを施し、底部の外面に回転ヘラ切り後にナデを施し、さらに、高台貼り付けに伴う回転ナデを施す。見込みは回転ナデ後に不定方向のナデを施す。

(3) ピット

P 33ピット（第10図、図版2）

調査区の北東隅にあり、規模が20×16cmで深さが7～8cmである。出土遺物は緑釉陶器が出土した。

出土遺物（第17図）

陶器

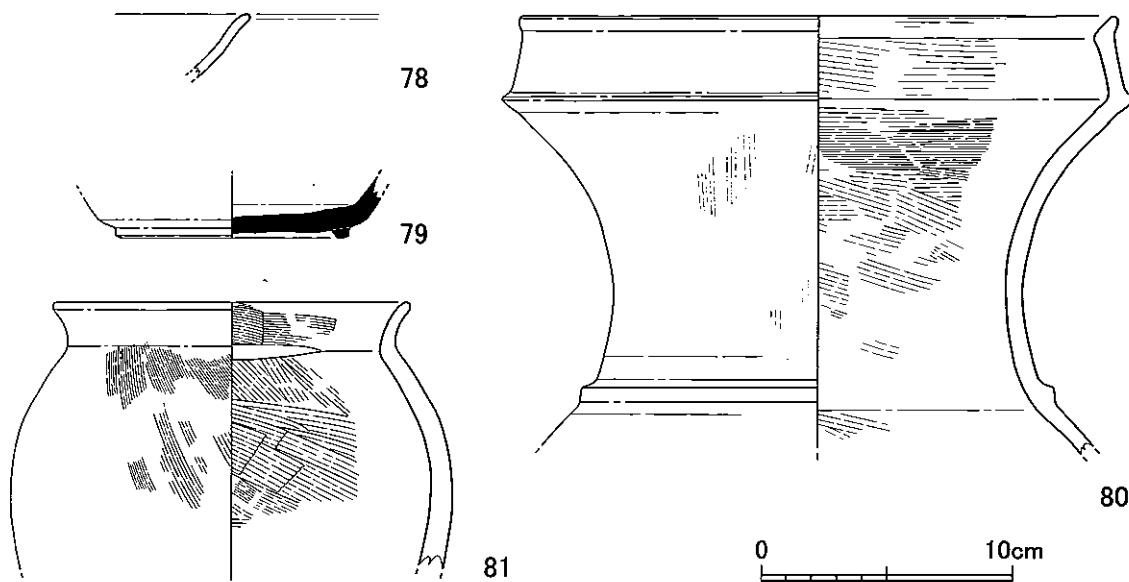
緑釉陶器（78） 78は椀もしくは皿であり、口縁端部がやや外反する。残存器高2.55cmである。体部の外面に回転ヘラケズリを施し、内外面に施釉を施す。また、貫入が見られる。

P 48ピット（第10図、図版2）調査区の中央にあり、規模が86×39cmで深さが11.5～18.5cmである。須恵器の杯身（79）が出土した。

出土遺物（第17図）

須恵器

杯身（79） 79は高台を持ち、復元高台径9.3cm、残存器高2.5cmである。内外面に回転ナデを施し、底部の外面に回転ヘラ切り後にナデを施し、さらに、高台貼り付けに伴う回転ナデを施す。見込みは回転ナデ後に横方向のナデを施す。



第17図 ピット出土遺物実測図 (1/3)

P 73 ピット（第 10 図、図版 6）

調査区の西側の S D 02 内で検出され、規模が 40 × 33cm で深さが 24 ~ 30 cm である。出土遺物は弥生土器の壺（第 17 図 80）・甕（第 17 図 81）である。

出土遺物（第 17 図）

弥生土器

壺（80） 80 は複合口縁壺で、口縁部が外反し、やや内傾する。肩部に 1 条の三角突帯を貼り付ける。復元口径 25.2cm、残存器高 17.4cm である。口縁部の外面は横ナデ、口縁部の内面には横ハケメを施す。頸部の外面は縦ハケメ後にナデを施し、頸部の内面には横・斜ハケメを施す。肩部の外面は磨耗により調整は不明、肩部の内面は斜ハケメを施す。

甕（81） 81 は頸部が如意状に外反している。復元口径 14.2cm、復元胴部最大径 17.6cm、残存器高 10.6cm である。口縁部の外面は横ナデを施し、口縁部の内面は横ハケメを施す。胴部の外面は縦ハケメを施し、胴部の内面は縦・斜ハケメを施す。弥生土器か土師器か迷う。

表1 横町遺跡1次出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径②器高③底径④高台径※()は復元径()は現存径	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調 D残存	備考
1	弥生土器	壺	SD01 I層	①(14.5) ②(8.55)	口縁部外面(内面継+横ハケメ)横ナデ、口縁端部刻目、頸部内面横方向ナデ、肩部外面斜+横ハケメ→丁寧なナデ、肩部内面斜ハケメ→ナデ。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、角閃石を多く含む。赤色粒子もわずかに含む Bやや不良 C外面:浅黄橙色 内面:浅黄橙色~黄橙色 D口縁部1/3	
2	弥生土器	壺	SD01 I層	①(15.5) ②(9.85)	磨耗(外面ナデ?)。	A0.5~2mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B不良 C外面:橙色 内面:黄橙色~浅黄橙色 D口縁部1/4	
3	弥生土器	甕	SD01 I層	①(13.1)②(8.0) 胴部最大径(13.05)	口縁部外面継ハケメ→横ナデ、口縁部内面横ハケメ、頸部内面ナデ、胴部外面横+斜ハケメ、胴部内面斜ハケメ→ナデ。	A0.5~2mm程の白色砂粒を少量含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面:にぶい橙色~黒褐色 内面:にぶい橙色 D肩部1/3	煤付着
4	弥生土器	甕	SD01 I層	②(8.4)	外面タキ、口縁部内面斜ハケメ、胴部内面斜+横ハケメ。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含む B良好 C外面:にぶい黄橙色~黒灰色 内面:にぶい黄橙色~灰黄褐色~黒灰色 D口縁部~胴部破片	煤付着 黒斑あり
5	弥生土器	穿孔土器	SD01 I層	②(6.95) 穿孔径1.3	外面タキ、内面ナデと指頭圧痕。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片を少量含む Bやや不良 C外面:にぶい黄橙色~黒灰色 内面:にぶい黄橙色D底部2/3	焼成前底部 穿孔・黒斑あり
6	弥生土器	高杯	SD01 I層	②(5.2)	磨耗(内外面斜ハケメ)。	A精良。微細な白色砂粒を少量含み、雲母細片をやや多く、赤色粒子をわずかに含む。B不良 C外面:にぶい橙色~黒色 内面:にぶい橙色~にぶい浅橙色 D杯部破片	黒斑あり
7	弥生土器	高杯	SD01 I層	②(11.25) 脚柱部径4.2	外面継ハケメ、内面継方向のナデ→断続的な横方向の板ナデ一周する。	A精良。微細な白色砂粒と赤色粒子を少量含み、雲母細片をやや多く含む。Bやや不良 C外面:橙色 内面:橙色~黄灰色 D脚部2/3	
8	弥生土器	高杯	SD01 I層	②(13.2) 脚柱部径3.9	外面継方向のナデ、脚柱部内面断続的な横方向の板ナデ一周、脚裾部内面横ハケメと継方向のナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒を少量、赤色粒子をわずかに含み、雲母細片をやや多く含む Bやや不良 C外面:橙色 内面:橙色 D脚部2/3	脚部3方向 に穿孔
9	弥生土器	高杯	SD01 I層	②(10.2) 脚裾部径(9.9)	脚部外面継ハケメ→継方向のナデ、脚部内面指頭圧痕・ナデと横ハケメ、杯部内面磨耗。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む B不良 C内外面:にぶい黄橙色~灰黄色 D脚部2/3	
10	弥生土器	複合口縁壺	SD01 II層	①(21.1) ②(7.0)	複合口縁上部内外面横ハケメ(内面成形時の指頭圧痕残る)→横ナデ→外面刻目。下部外面継ハケメ、内面斜ハケメ。	A0.5~3mm程の白色砂粒と雲母細片、赤色粒子をやや多く含む B良好 C外面:橙色 内面:浅橙色~褐灰色 D口縁部1/4	
11	弥生土器	複合口縁壺	SD01 II層	②(8.3)	複合口縁上部内外面横ハケメ→横ナデ(内面成形時の横方向のナデ・指頭圧痕残る)、下部内外面斜ハケメ。	A0.5~5mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面:にぶい橙色 内面:にぶい橙色~灰黄褐色 D口縁部破片	
12	弥生土器	複合口縁壺	SD01 II層	①(11.0) ②(6.7)	外面(複合口縁上部横ハケメ・下部継ハケメ→)ミガキ、複合口縁上部内外面横ハケメミガキ、下部内面斜ハケメ。	A0.5~2mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片をやや多く、赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面:灰黄褐色~黒褐色 D口縁部2/5	
13	弥生土器	高杯?	SD01 II層	②(2.7)	磨耗。口縁部外面波状文。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面:浅黄橙色 内面:灰白色~浅黄橙色 D口縁部破片	
14	弥生土器	壺	SD01 II層	①(14.4) ②(7.3)	外面磨耗(横ナデ・ナデ?)、口縁部内面継ハケメ→横ナデ、頸部内面ナデ・指頭圧痕、肩部内面ナデ。	A0.5~3mm程の白色砂粒と雲母細片・角閃石をやや多く含み、赤色粒子をわずかに含む B不良 C外面:灰黄褐色~灰褐色 内面:灰黄褐色 D口縁部1/4	
15	弥生土器	壺	SD01 II層	②(7.8)③5.2 胴部最大径9.8	外面磨耗(継ハケメ)、内面ケズリ状の板ナデ→底部ナデ(肩部内面成形時の指頭圧痕残る)。	A0.5~8mm程の白色砂粒を多く含み、赤色粒子をやや多く、雲母細片を少量含む Bやや不良 C外面:橙色~浅黄橙色 内面:橙色 D肩部~底部完存	
16	弥生土器	壺	SD01 II層	②(5.35) 胴部最大径(9.2)	外面指頭圧痕・ナデ、内面板ナデかハケメ→指頭圧痕・ナデ。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む Bやや不良 C内外面:橙色~灰黄褐色 D底部完存	黒斑あり
17	弥生土器	甕	SD01 II層	②(4.4)	外面継ハケメ→ナデ?、内面成形時の指頭圧痕一周する。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片をやや多く含む Bやや不良 C外面:橙色~暗褐色 内面:赤褐色~暗褐色~黒褐色 D口縁部破片	
18	弥生土器	甕	SD01 II層	①(34.8) ②(9.7)	口縁部内外面横ハケメ→横ナデ、胸部内外面継+斜ハケメ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B不良 C内外面:浅黄橙色~橙色 D口縁部1/3	焼け歪みあり
19	弥生土器	甕	SD01 II層	②(6.3)	外面斜+継ハケメ、口縁部内面横ハケメ、胸部内面斜ハケメ・指頭圧痕。口縁部直下に刻目突起。	A0.5~3mm程の白色砂粒と雲母細片を少數含み、角閃石をやや多く含む B良好 C外面:浅黄橙色~橙色 内面:浅橙色~にぶい黄橙色 D口縁部~胸部破片	

表2 横町遺跡1次出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm)①口徑②器高③底径④高台径※()は復元径()は現存長	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調 D残存	備考
20	弥生土器	甕	SD01 II層	①(24.0) ②(5.45)	口縁部内外面(外面縦ハケメ・内面斜ハケメ→)横ナデ、胴部外面縦ハケメ→ナデ、胴部内面縦ハケメ→板ナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面: 橙色~黒褐色 内面: 橙色~にぶい黄橙色 D口縁部1/6	
21	弥生土器	甕	SD01 II層	②(5.0)	口縁部内外面(外面斜ハケメ・内面横ハケメ→)横ナデ、胴部内外面斜ハケメ。口縁部直下に突巒。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む B良好 C 内外面: 浅黄橙色~にぶい黄橙色 D口縁部破片	
22	弥生土器	甕	SD01 II層	②(5.1)③6.4	外面縦ハケメ、内面磨耗(ナデ・指頭圧痕?)。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片を少量含む Bやや不良 C外面: 橙色~黄橙色 内面: 浅黄橙色~黒褐色 D底部完存	
23	弥生土器	甕	SD01 II層	②(6.0)③7.1	外面縦ハケメ、内面磨耗(底部指頭圧痕)。	A0.5~4mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面: 橙色~浅黄橙色 内面: 灰黄褐色~浅黄橙色 D底部完存	
24	弥生土器	甕	SD01 II層	①(16.2) ②(10.6) 胸部最大径(14.9)	口縁部内外面横ナデ(内面成形時のナデ殘る)、胴部外面粗い縦ハケメ、胴部内面斜ハケメ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む B良好 C外面: にぶい黄橙色~黒褐色 内面: 浅黄橙色~にぶい黄橙色 D胴部1/3(口縁部1/6)	黒斑あり 煤付着
25	弥生土器	甕	SD01 II層	②(7.6)	口縁部内外面横ナデ、頸部内面ナデ?、胴部外面縦ハケメ、胴部内面斜ハケメ。	A0.5~4mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片を少量、赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面: にぶい黄橙色~にぶい橙色~灰黄褐色 内面: にぶい黄橙色~にぶい橙色 D口縁部破片	
26	弥生土器	甕	SD01 II層	①(12.2) ②(4.95)	口縁部内外面横ナデ、肩部外面磨耗、肩部内面ナデ・指頭圧痕→斜+横ハケメ。	A0.5~2mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B不良 C外面: 浅黄橙色~灰白色 内面: にぶい黄橙色~灰白色 D口縁部~肩部1/5	
27	弥生土器	甕	SD01 II層	②(4.0)③8.3	磨耗(底部外面不定方向のハケメ、内面斜ハケメ・横方向の断続的なナデ一周する)。	A0.5~3mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片をごくわずかに含む Bやや不良 C外面: 橙色~にぶい黄橙色~黒褐色 内面: にぶい黄橙色~灰黄褐色 D底部3/4	煤付着
28	弥生土器?	甕	SD01 II層	②(3.65)	磨耗(口縁部外面横ハケメ・肩部外面縦ハケメ)。	A0.5~3mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面: 黑褐色~にぶい黄橙色 内面: 黄橙色 D口縁部破片	
29	弥生土器	甕	SD01 II層	②(3.4)③(3.2)	外面タキ(下部指頭圧痕・底面ナデ)、内面縦+斜ハケメ。	A微細な白色砂粒と雲母細片・角閃石を少量含む B良好 C外面: 灰黄褐色~橙色~黄橙色 内面: 浅黄橙色~橙色 D底部1/3	
30	弥生土器	甕?	SD01 II層	②(8.2)	外面縦方向の粗い板ナデ(底部は斜方向)、内面縦+斜方向の粗い板ナデ。	A0.5~5mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む B良好 C外面: 橙色~にぶい黄橙色 内面: にぶい黄橙色 D 胴部下位~底部1/3	
31	弥生土器	穿孔土器	SD01 II層	②(8.4)③2.3 穿孔径1.2	内外面縦ハケメ、底部焼成前に内側から穿孔→ナデ・指頭圧痕。	A0.5~3mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面: にぶい黄橙色~灰黄褐色~黒褐色 内面: 黄褐色~黒褐色~黒褐色 D底部ほぼ完存	黒斑あり
32	弥生土器	壺か鉢底部?	SD01 II層	②(2.1)	外面ナデ・指頭圧痕、内面は放射状の板ナデ。	A1mm以下の微細な白色砂粒を少量含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面: にぶい黄橙色 内面: 灰黑色 D底部1/3	
33	弥生土器	蓋つまみ	SD01 II層	②(2.6) つまみ径2.3	外面ナデ、天井部(ハケメ?→)指頭圧痕、内面磨耗(ナデ?)。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片を少量含む B良好 C内外面: 浅黄橙色~橙色 Dつまみ完存	
34	弥生土器	蓋	SD01 II層	②(3.2)	磨耗(内外面斜ハケメ→ナデ?)。	A0.5~1mm程の白色砂粒と雲母細片を少量含む B不良 C外面: 浅橙色~浅黄橙色~黒灰色 内面: にぶい黄橙色~にぶい橙色~黒色 D蓋鋸部破片	黒斑あり
35	弥生土器	脚付鉢	SD01 II層	①(17.95) ②16.85 脚裾部径(12.1)	鉢部内外面磨耗(体部外面斜+縦ハケメ、体部内面ナデ?)、脚部外面縦ハケメ、脚部内面横方向の断続的なナデ、脚裾部外面横ナデ。	A0.5~3mm程の白色砂粒と黒色砂粒・赤色粒子を多く含み、雲母細片をわずかに含む B不良 C外面: 浅黄橙色~黒褐色 内面: 浅黄橙色 D1/2	黒斑あり
36	弥生土器	鉢	SD01 II層	②(5.3)	外面ミガキ、口縁部内面ミガキ、体部内面粗い横ハケメ→暗文状のミガキ。	A1mm以下の白色砂粒と雲母細片を少量含む B良好 C外面: 灰黄褐色~黒褐色 内面: にぶい黄橙色 D口縁部破片	
37	弥生土器	鉢	SD01 II層	②(4.7)	磨耗(外面縦ハケメ)。	A0.5~3mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B不良 C内外面: 浅黄橙色 D口縁部破片	
38	弥生土器	鉢	SD01 II層	①(16.6) ②(6.4)	磨耗(内外面縦ハケメ)。	A0.5~4mm程の白色砂粒と雲母細片・赤色粒子を少量含む Bやや不良 C内外面: 橙色 D1/4	

表3 横町遺跡1次出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm) ①口径②器高③底径④高 台径※()は復元径()は現存長	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調 D残存	備考
39	弥生土器	高杯?	SD01 II層	①(33.0) ②(5.3)	口縁部内外面(内面成形時の指頭圧痕、縦ハケメ→横ナデ、体部内外面(外面斜ハケメ、内面縦ハケメ)ナデ。	A0.5~2mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片をやや多く含む。赤色粒子も少量含む Bやや不良 C外面: 橙色~黄褐色 内面: 橙色 D口縁部1/4	
40	弥生土器	高杯	SD01 II層	②(4.6)	外面磨耗(縦ハケメ・脚部接合の刻目)、内面放射状のハケメ。	A0.5~4mm程の白色砂粒と雲母細片を少 量含む Bやや不良 C外面: 浅黄褐色~橙 色~黒灰色 内面: 浅黄褐色~橙色 D杯底 部完存	
41	弥生土器	高杯	SD01 II層	②(10.5) 脚部径9.9	外面丁寧なナデ、杯部内面放射状のハケメ →ナデ・指頭圧痕、脚部内面横ハケメ・ナデ。	A0.5~4mm程の白色砂粒をやや多く含み、 雲母細片と赤色粒子を少量含む Bやや不 良 C外面: にぶい黄褐色~灰黄褐色~黒 褐色 内面: にぶい黄褐色~灰黄褐色 D脚 部ほぼ完存	
42	弥生土器	器台	SD01 II層	①(16.6) ②(13.3)	口縁部内外面横ナデ、体部外面縦ハケメ、 体部内面板ナデ→ナデ・指頭圧痕。	A0.5~2mm程の白色砂粒をやや多く含み、 雲母細片を少 量含む Bやや不良 C内外 面: 浅黄褐色~にぶい黄褐色 D口縁部1/4	
43	弥生土器	脚	SD01 II層	②(7.85)③(12.4)	外面ナデ、内面板ナデ・縦+斜ハケメ・指頭圧 痕、脚根部内外面横ナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含み、 雲母細片を少 量含む B良好 C外面: 浅黄褐色~にぶい 橙色(端部一部黒灰色) 内 面: 黒灰色~浅黄褐色 D脚部1/6	
44	弥生土器	壺?	SD01 II層	②(3.0)③2.8	外面斜ハケメ(成形時の指頭圧痕残る)、底 部外面ナデ、内面ナデ・指頭圧痕。	A0.5~1mm程の白色砂粒と雲母細片を少 量含む B良好 C外面: 黒褐色~にぶい黄 褐色 内面: にぶい黄褐色 D底部完存	
45	不明 土製品		SD01 II層	長さ(8.6) 幅(6.8) 高さ(3.8)	ナデと指頭圧痕で成形、凸面のみ刻目施 す。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片を少 量含み、赤色粒子をわずかに含む B良好 C橙色~にぶい黄褐色~灰黄褐色 D完形	
46	石器	打製 石鎌	SD01 II層	長さ(2.5) 幅 1.4 厚さ 0.4 重さ 1.34g		D先端部欠損	安山岩
47	石器	打製 石鎌	SD01 II層	長さ(2.5) 幅 1.1 厚さ 0.3 重さ 0.78g		D脚部欠損	黒曜石
48	石器	打製 石鎌	SD01 II層	長さ 1.4 幅 1.5 厚さ 0.3 重さ 0.59g		D完形	黒曜石
49	石器	打製 石鎌	SD01 II層	長さ(1.7) 幅(1.6) 厚さ 0.35 重さ 0.58g		D先端及び左脚部欠損	黒曜石
50	石器	スクレ イバー	SD01 II層	長さ(2.7) 幅 1.9 厚さ 0.7 重さ 4.35g		D端部欠損	黒曜石 サドスレイ バー?
51	弥生土器	甕	SK20	①(25.2) ②(9.15)	磨耗(口縁部横ナデ、胸部外面縦ハケメ)。	A0.5~3mm程の白色砂粒をやや多く含み、 雲母細片と赤色粒子を少量含む B不良 C 外面: にぶい黄褐色~褐灰色 内面: にぶ い黄褐色 D口縁部1/4	

表4 榎町遺跡2次出土遺物観察表①

遺物番号	種類	器種	出土地点	法寸(cm)①口径②器高③底径④高台径()は復元径()は現存長	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調 D残存	備考
52	弥生土器	複合口縁壺	SD03	①(22.1) ②(6.0)	複合口縁上部内外面横ナデ、頸部外面横ハケメ、下部内面横ハケメ→ナデ(成形時の断続的な横方向のナデも一周残る)。	A0.5~1mm程の白色砂粒と角閃石をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む Bやや不良 C外面:橙色 内面:橙色~黄橙色 D口縁部1/4	
53	弥生土器	複合口縁壺	SD03	②(5.55)	複合口縁上部内外面横ナデ、下部外面縦+斜ハケメ、下部内面磨耗(斜ハケメ→ナデ)・成形時の断続的な横方向のナデも一周残る)。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片を少量含み、赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面:浅黄橙色~黄橙色 内面:黄橙色 D口縁部破片	
54	弥生土器	複合口縁壺	SD03	①(13.3) ②(6.1)	複合口縁上部内外面横ナデ、下部外面ナデ、下部内面横ハケメ→ナデ(成形時の指頭圧痕と断続的な横方向のナデも一周残る)。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片・赤色粒子を少量含む B良好 C外面:橙色~黄橙色 内面:橙色 D口縁部1/4	
55	弥生土器	壺	SD03	①(7.7) ②(7.6) 胴部最大径(9.3)	外面ミガキ、口縁部内面横ナデ、胴部~底部内面放射状のハケメ→丁寧なナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒を少量含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面:橙色~浅黄橙色~灰黒色 内面:灰黒色~黄橙色 D胴部~底部2/3(口縁部1/5)	黒斑あり
56	弥生土器	甕	SD03	①(20.8) ②(5.65)	口縁部外面横ナデ(外面横ハケメ→縦ハケメ→、内面横ハケメ)、肩部外面縦ハケメ、肩部内面斜ハケメ。	A0.5~1mm程の白色砂粒と雲母細片を少量含み、赤色粒子をごくわずかに含む B良好 C外面:橙色~浅黄橙色~黑褐色 内面:浅黄橙色~橙色~黑褐色 D口縁部1/4	黒斑あり
57	弥生土器	脚	SD03	②(5.45)③(10.0)	外面縦ハケメ、内面ナデ・指頭圧痕、脚裾部外面磨耗(内面横ハケメ)、体部内面(ハケメ→)ナデ。	A0.5~4mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片を少量含む Bやや不良 C外面:にぶい橙色~浅黄橙色~灰黒色 内面:にぶい橙色~浅黄橙色 D脚部2/3	黒斑あり
58	弥生土器	鉢?	SD03	①(22.7) ②(7.15)	口縁部内外面(縦ハケメ)横ナデ、体部外面縦+斜ハケメ→ナデ・指頭圧痕、体部内面縦ハケメ。	A0.5~4mm程の白色砂粒と雲母細片を少量含む B良好 C外面:明赤褐色~橙色~黑褐色 内面:橙色~明赤褐色 D1/4	黒斑あり
59	弥生土器	高杯	SD03	①(24.8) ②(6.3)	口縁端部外面磨耗(横ナデ?)、外面斜ハケメ→ミガキ、内面斜+横ハケメ→ミガキ。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片・赤色粒子をわずかに含む B良好 C外面:橙色~にぶい橙色~灰黄褐色 内面:橙色 D杯部1/4	
60	弥生土器	高杯	SD03	②(6.75)	口縁部内外面磨耗(横ナデ?)、外面斜+横ハケメ→ナデ→暗文風のミガキ、体部内面斜ハケメ→ナデ→暗文風のミガキ、底部内面縦ハケメ→ナデ?→ミガキ。	A0.5~4mm程の白色砂粒と赤色粒子を少量含み、雲母細片をやや多く含む Bやや不良 C外面:黄橙色 内面:にぶい黄橙色~浅橙色 D杯部破片	
61	弥生土器	高杯	SD03	②(10.0)	杯部外面縦ハケメ→粗いミガキ、杯部内面不定方向のハケメ→雜なミガキ、脚部外面縦ハケメ(成形時のナデ残る)、脚部内面ケズリ状の断続的な板ナデ一周する。	A0.5~1mm程の白色砂粒をわずかに含み、雲母細片と赤色粒子を少量含む Bやや不良 C外面:浅黄橙色~橙色~黄橙色 内面:橙色~黄橙色 D口縁部・脚裾部欠損	
62	弥生土器	高杯	SD03	②(11.0)③(12.8) 孔径1.0~1.1	杯部内面磨耗(ミガキ?)、脚部外面縦ハケメ→ナデ、脚部内面ケズリ状の断続的な板ナデ一周→ナデ、脚裾部内面斜ハケメ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をわずかに含み、雲母細片を少量含む B良好 C内外面:にぶい黄橙色 D脚部ほぼ完存	脚部2方向 穿孔・杯部との接合面に刻印
63	弥生土器	高杯	SD03	①(21.1) ②(7.2)	口縁端部外面横ナデ、杯部→脚柱部外面縦ハケメ→ミガキ、杯部内面横ハケメ→ミガキ、脚柱部内面指頭圧痕。	A0.5~6mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片を少量、角閃石をわずかに含む Bやや不良 C外面:黄橙色~橙色~黒色 内面:橙色~にぶい橙色 D杯部4/5	黒斑あり
64	弥生土器	器台	SD03	①10.05 ②13.9③(10.4)	外面縦ハケメ、内面断続的な板ナデ一周→ナデ・指頭圧痕。	A0.5~6mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と角閃石を少量含む B良好 C内外面:橙色~明赤褐色 D3/4	
65	弥生土器	沓形器台	SD03	②12.1③(9.0) 突出部含む上面幅(6.9)	外面タタキ→縦方向の板ナデ、上面ナデ、突出部ナデ・指頭圧痕、内面粗いナデ。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含む B良好 C外面:黄橙色~にぶい黄橙色 内面:にぶい黄橙色 D1/3	
66	弥生土器	沓形器台	SD03	②(7.1) 上面径(5.0) 突出部含む上面径幅(6.5)	外面タタキ、上面磨耗(ナデ?)、突出部ナデ・指頭圧痕、内面磨耗(ナデ?)。上面穿孔。	A0.5~2mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B不良 C外面:黄橙色~黒灰色 内面:浅黄橙色 D上部1/3	黒斑あり
67	弥生土器	鉢	SD03	①(3.7) ②4.65	ナデ・指頭圧痕。	A0.5~1mm程の白色砂粒と雲母細片・赤色粒子を少量含む B良好 C内外面:にぶい黄橙色 D1/2	
68	弥生土器	鉢	SD03	①(7.3) ②3.4	外面ナデ・指頭圧痕、内面板ナデ→ナデ・指頭圧痕。	A0.5~2mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む Bやや不良 C外面:浅黄橙色~灰黒色 内面:にぶい黄橙色~明黄褐色 D1/4	黒斑あり・胎土にスサ混入
69	弥生土器	鉢	SD03	①(8.8) ②4.3③(4.2)	外面縦ハケメ、内面横+斜ハケメ(底部ケズリ状の強いハケメ)。	A0.5~4mm程の白色砂粒をやや多く含み、雲母細片と赤色粒子をわずかに含む B良好 C内外面:浅黄橙色 D1/2	
70	石器	磨石	SD03	長さ(10.4) 幅 8.2 厚さ 4.1 重さ605.32g		D1/2	玄武岩?
71	石器	砥石	SD03	長さ 11.4 幅 9.7 厚さ 5.3 重さ 756.07g	砥面3面。	D完形	砂岩

表5 横町遺跡2次出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量(cm)①口径②器高③底径④高台径※()は復元径()は現存長	形態・技法の特徴	A胎土 B焼成 C色調 D残存	備考
72	石器	砥石	SD03	長さ 13.1 幅 9.3 厚さ 6.9 重さ 910.19g	砥面5面。	D完形	砂岩
73	石器	砥石	SD03	長さ 14.8 幅 14.9 厚さ 2.2 重さ 628.27 g	砥面3面。	D完形	砂岩
74	須恵器	杯身	SK01	①13.3 ②3.95③8.6	内外面回転ナデ(体部外面下位に指頭痕あり)、底部外面回転ヘラ切りナデ、見込み回転ナデ→横方向のナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒を少量含む B良好 選元:良好 C内外面:灰色~黄灰色 D4/5	内面に植物圧痕あり
75	土師器	杯	SK01	①(15.7)②(5.25) 推定高(6.1)③(9.7)	磨耗(回転ナデ)。	A0.5~7mm程の白色砂粒をわずかに含み、雲母細片と赤色粒子をやや多く含む B不良 C内外面:橙色 D1/3	
76	須恵器	杯蓋	SK02	①(18.0) ②(2.05)	外面回転ナデ→回転ヘラケズリ→つまみ貼り付けに伴う回転ナデ、内面回転ナデ→横方向のナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒をやや多く含む B良好 選元:不良 C外面:灰黄色 内面:灰白色 D1/4	外面に植物圧痕あり
77	須恵器	杯身	SK02	②(1.8)④(11.0)	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラ切り→ナデ→高台貼り付けに伴う回転ナデ、見込み回転ナデ→不定方向のナデ。	A0.5~1mm程の白色砂粒を少量含む B良好 選元:不良 C外面:黄灰色~灰白色 内面:灰白色 D底部2/5	
78	綠釉陶器	椀か皿	P33	②(2.55)	内外面施釉。体部外面回転ヘラケズリ?	A精良。微細な砂粒をわずかに含む。灰白色 B良好 C釉:淡緑色 D口縁部破片	費入あり
79	須恵器	杯身	P48	②(2.5)④(9.3)	内外面回転ナデ、底部外面回転ヘラ切り→ナデ→高台貼り付けに伴う回転ナデ、見込み回転ナデ→横方向のナデ。	A. 1mm以下の白色砂粒をやや多く含み、黒色粒子と角閃石をわずかに含む B良好 選元:不良 C内外面:灰白色~灰黄色 D底部1/3	
80	弥生土器	複合口縁壺	P73	①(25.2) ②(17.4)	袋状口縁上部外面横ナデ、上部内面横ハケメ、下部外面縦ハケメーナデ、下部内面横+斜ハケメ、肩部外面磨耗(ハケメーナデ)、肩部内面斜ハケメ。肩部貼り付け突起。	A0.5~2mm程の白色砂粒と雲母細片をやや多く含み、角閃石をごくわずかに含む B良好 C外面:浅黄橙色~浅橙色 内面:浅黄橙色~にぶい黄橙色 D口縁部1/3	
81	弥生土器	甕	P73	①(14.2) ②(10.6) 胸部最大径(17.6)	口縁部外面横ナデ、口縁部内面横ハケメ(頸部形成時のナデも残る)、肩部外面縦ハケメ、肩部内面縦+斜ハケメ。	A0.5~2mm程の白色砂粒を多く含み、雲母細片と赤色粒子、角閃石を少量含む Bやや不良 C外面:浅橙色 内面:橙色~にぶい黄橙色 D口縁部1/4	

IV. まとめ

榎町遺跡は御笠川右岸の沖積平野に位置し、2次に渡る調査区の位置関係は1次調査の西側に隣接して、2次調査区が位置する。

1. 1次調査

1次調査で確認された遺構は溝1条、土坑2基、ピットであり、溝SD 01の周辺に遺構が集中している。これらの遺構から出土した遺物は弥生時代後期のものが主体であった。特に、SD 01からは弥生時代後期の遺物が集中して出土した。

SD 01の層序は上層のI層と下層のII層とに分けられる。このSD 01のI層からは弥生時代中期から後期にかけての遺物が出土した。この内、後期の高三瀬式土器から下大隈式土器にかけての遺物が主に確認でき、西新式土器も出土した。II層からは弥生時代中期の須玖式土器から後期の下大隈式土器の他に、下大隈式土器から西新式土器にかけての複合口縁の壺（第6図10～12）や西新式土器の甕の底部（第7図30）が出土した。以上より、混入と思われる須恵器片も出土しているが、SD 01は中期の須玖式土器から後期の西新式土器までの時期の溝と考えられる。この溝の直線的な形状と調査時の所見から、人為的な遺構と考えられる。

また、この溝以外の土坑やピットからは弥生時代中期から後期にかけての遺物が多く出土した。

調査区で最も古い遺構はSK 20であり、出土した甕（第9図51）から考えて弥生時代中期前半の遺構である。

最も古い出土遺物は安山岩製や腰岳産黒曜石製の石鏃やスクレイパーがSD 01に混入し出土しており、縄文時代の遺物の可能性がある。中でも第8図48の正三角形鏃は基部形状が「U」字状の抉り込みを持つ縄文時代早期中葉から後半の鉤形鏃が出現する以前の形態である。そのため、早期中葉から前半の遺物の可能性がある。周辺では御笠川を挟んだ対岸の石勺遺跡F地点より縄文時代早期の押型文土器が出土し、G地点では落とし穴が確認されている。また、遺跡より西300mの御笠川と牛頸川との合流地点で縄文時代の遺物が採集されている。この様に本遺跡周辺では散在的に縄文時代の遺物や遺構が見られることから、SD 01に混入していた石器は周辺の当該期の集落よりもたらされた可能性もある。

2. 2次調査

2次調査で確認された遺構は溝3条、土坑5基、ピットであり、調査区の北西側は削平により遺構が確認できなかった。これらの遺構から出土した遺物は1次調査と同様に弥生時代後期が主体であった。特にSD 03に集中して出土している。SD 03の遺物は高三瀬式土器から西新式土器の遺物が多いため、その時期の遺構であろう。

遺物に注目してみると、SD 03からは磨石や砥石が出土している。これらの石器はやや重量があるため、日常生活で用いられていた原位置から大きく移動する物ではない。恐らく、近辺から廃

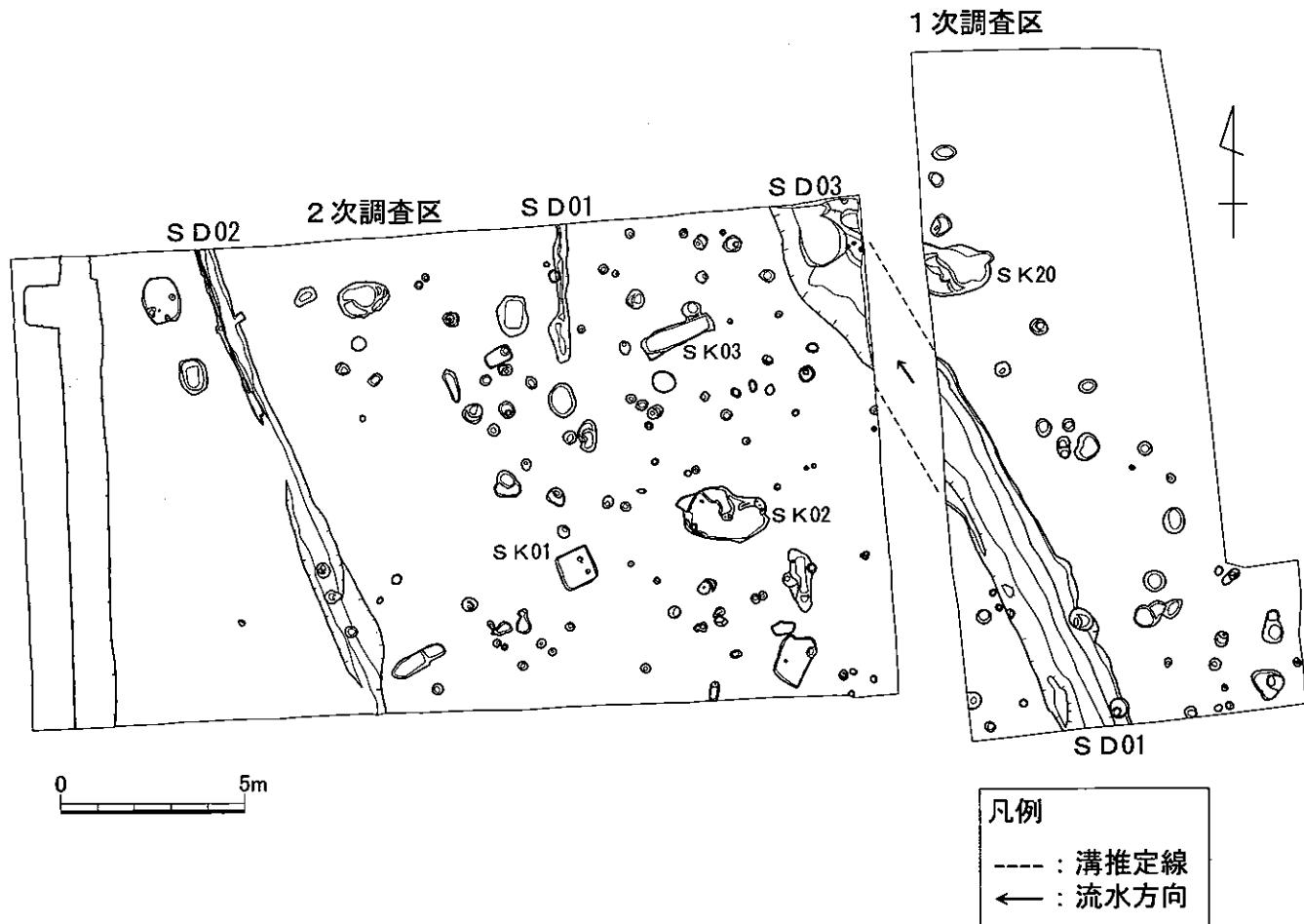
棄された遺物であろう。

弥生時代以降の遺構としては次のものが確認できた。まず、SK 01 からは8世紀頃の須恵器の杯と土師器の杯がそれぞれ並んで出土した。SK 02 からは8世紀頃の須恵器の杯蓋と杯身が出土した。P 33からは9~10世紀頃の綠釉陶器が出土している。P 48からは8世紀の須恵器の杯身が出土した。以上の様に、古代の遺構も散在して見られる。

3. 両調査区の溝について

1次調査区のSD 01と2次調査区のSD 03は位置や方位から同一の溝である可能性が高い。さらに、出土遺物からも先述した様に1次調査SD 01は弥生時代中期から後期の土器が多く出土し、一方、2次調査SD 03も弥生時代後期の土器が多く出土した。つまり、両溝ともに高三瀬式土器から西新式土器にかけての同時期の遺物が出土する点で共通することからも1次調査区のSD 01と2次調査区のSD 03は同一の溝と言えよう。

1次調査のSD 01は溝底のレベル差より北西に深く南東から北西に向って走る溝である。また、2次調査のSD 03は調査区隅で確認されたため溝底のレベル差は不明だが、1次調査のSD 01と



第18図 榎町遺跡1・2次遺構配置図 (1/200)

同一の溝である可能性から北西に走る溝と考えられる。広域的な視点で見れば、1次調査区から2次調査区へ直線的に伸びる溝の北西400m先には御笠川が位置する。このSD01とSD03は弥生時代後期に集落を走る用・排水路として用いられていた溝の可能性があり、御笠川へ流れ込んでいたことも考えられる。

以上、榎町遺跡における1・2次の調査では弥生時代後期と奈良時代を主とする遺構が確認された。

参考文献

- 『権現脇遺跡』 深江町文化財調査報告書第2集 深江町教育委員会 2006
- 『中原遺跡 - 1・2区の調査 -』 佐賀市埋蔵文化財調査報告書第19集 佐賀市教育委員会 2007
- 『大野城市史 上巻』 大野城市史編さん委員会 2005
- 『石勺遺跡II - G地点の調査 -』 大野城市文化財調査報告書第50集 大野城市教育委員会 1997
- 『牛頭窯跡群』 大野城市文化財調査報告書第77集 大野城市教育委員会 2008
- 小田富士雄 「九州の弥生土器 後期の土器」『九州考古学研究』弥生時代篇 学生社 1983
- 久住猛雄 「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』19 庄内式土器研究会 1999
- 『西新町遺跡II』 福岡県文化財調査報告書第134集 福岡県教育委員会 2000
- 平美典 「北部九州における中期～後期前半の土器と併行関係」『弥生中期土器の併行関係』第53回埋蔵文化財研究集会 埋蔵文化財研究会 2004
- 田崎博之 「須玖式土器の再検討」『史淵』第122輯 九州大学文学部 1985
- 田崎博之 「北部九州筑前」『弥生後期の瀬戸内海 - 土器・青銅器・鉄器からみたその領域と交通 -』 古代学協会 1996
- 常松幹雄 「伊都国・奴国の土器」『古代探叢III』 早稲田大学考古学会 1991
- 『弥生時代の石器 - その始まりと終わり -』 第I部第1分冊九州編 埋蔵文化財研究会 1992
- 柳田康雄 「北部九州の土器編年」『九州弥生文化の研究』 学生社 2002
- 『大宰府条坊II』 太宰府市教育委員会 1983
- 山本信夫 「北部九州の7～9世紀中頃の土器」『古代の土器研究』第1回 古代の土器研究会 1992

図 版

※ 遺物写真の番号は、挿図中の
遺物の番号と一致する。



(1) 1次調査区 完掘全景（北東から）



(2) 1次調査区と周辺（北東から）

図版 2



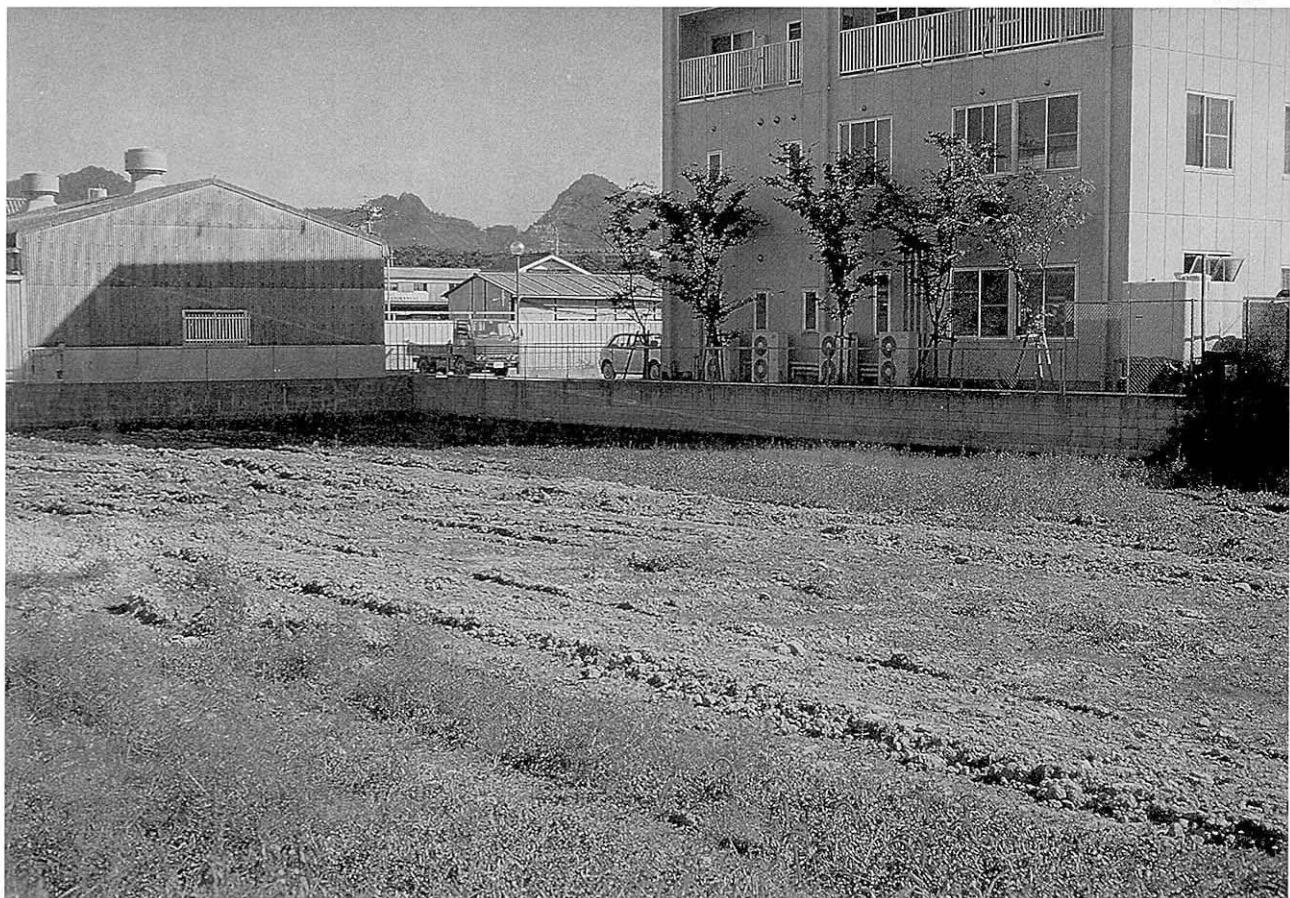
(1) 1次調査 SD01 土層（北から）



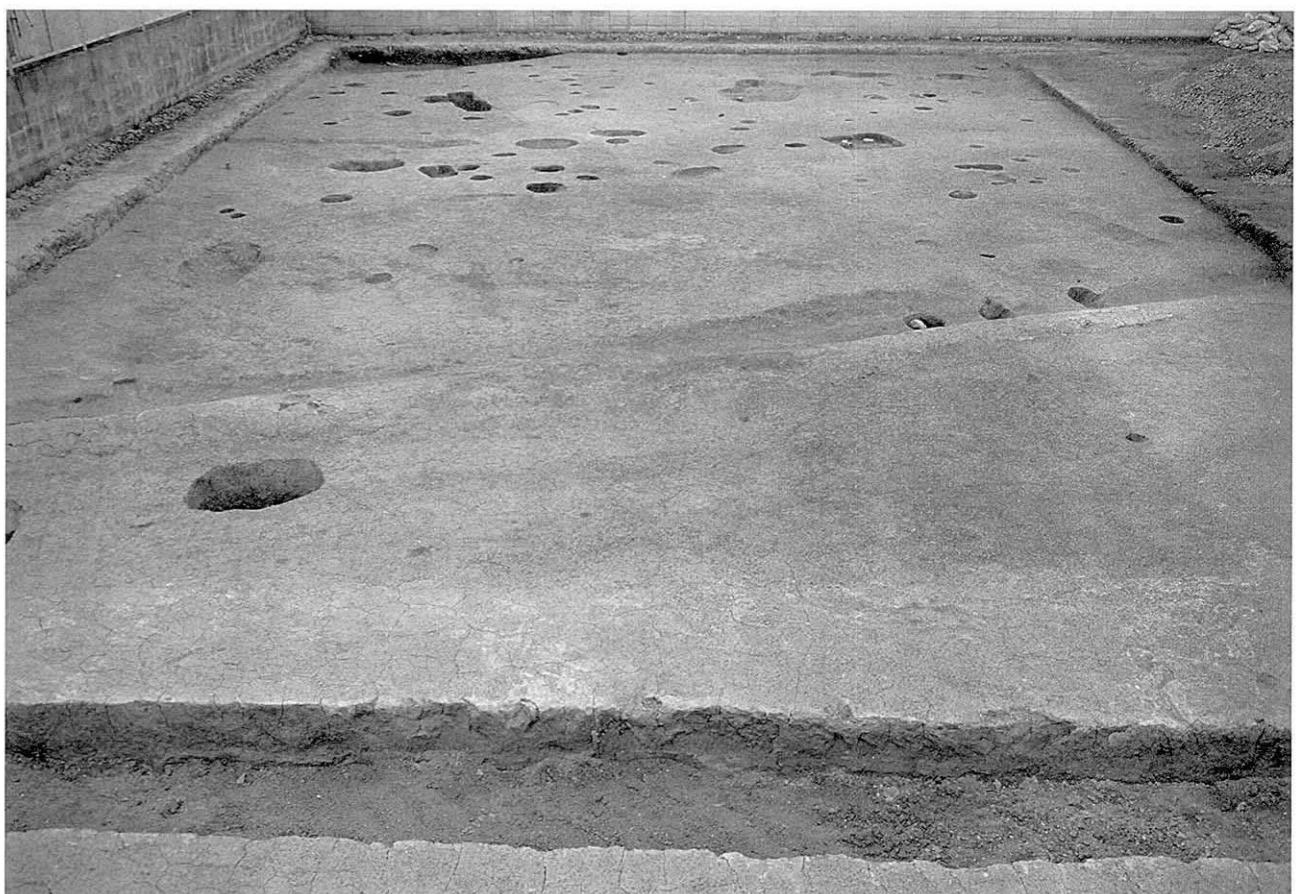
(2) 1次調査 SD01 遺物出土状態①



(3) 1次調査 SD01 遺物出土状態②



(1) 2次調査区 調査前全景（南西から）

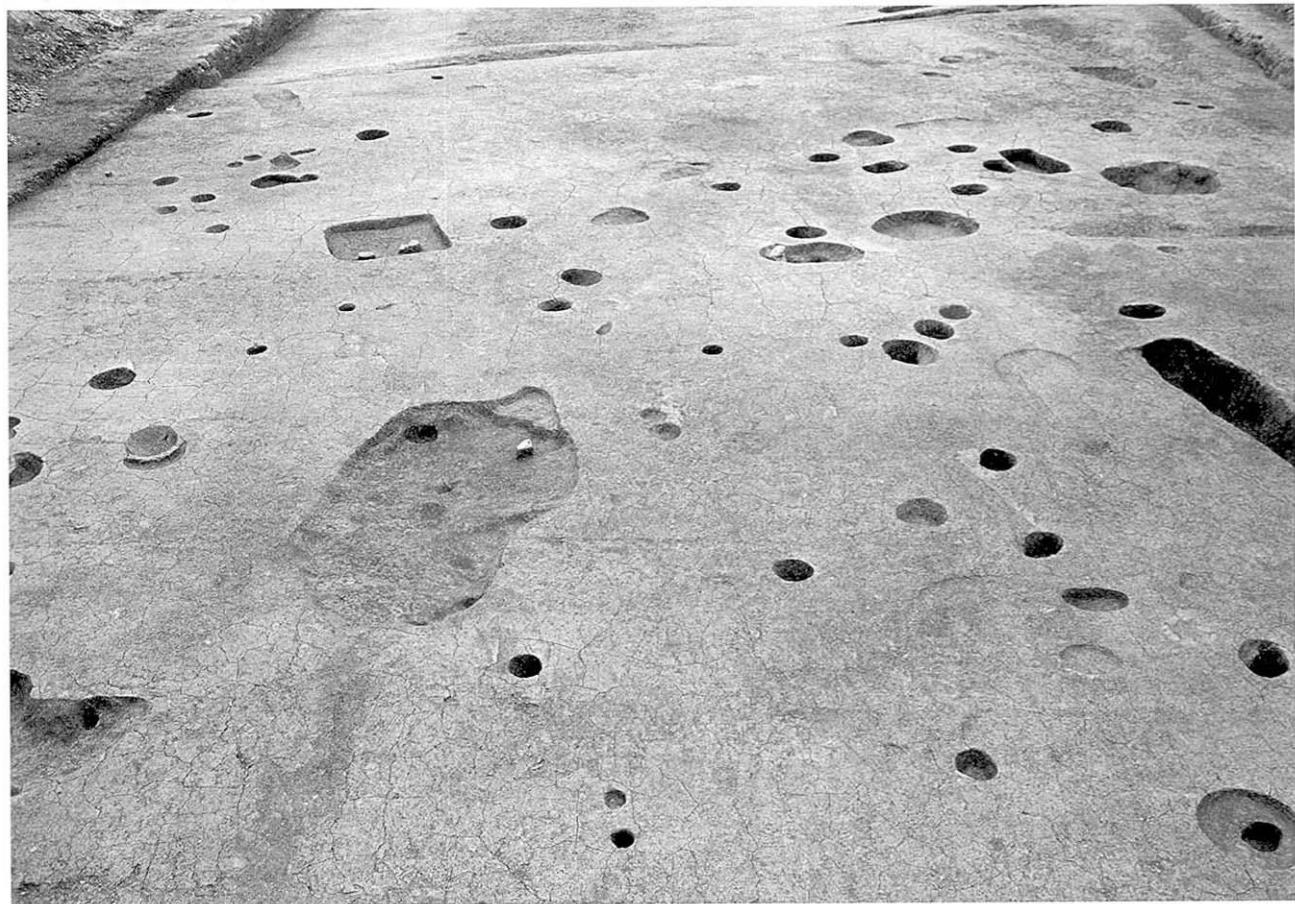


(2) 2次調査区 全景（西から）

図版 4



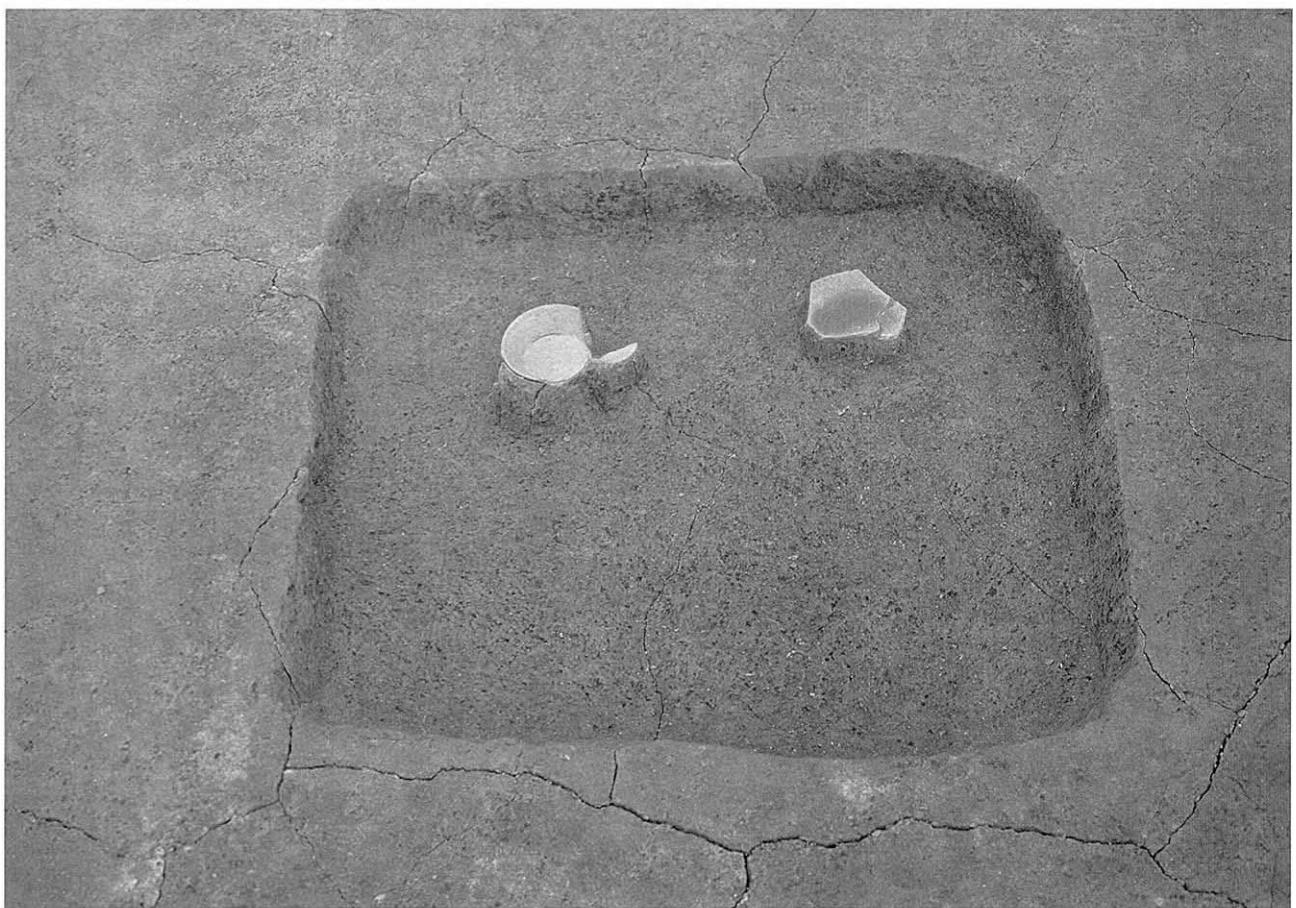
(1) 2次調査区東半 (南から)



(2) 2次調査区中央 (東から)



(1) 2次調査 SD03 (南東から)



(2) 2次調査 SK01 (南西から)

図版 6



(1) 2次調査 P73 遺物出土状態（南から）



(2) 2次調査 P66 (西から)



16



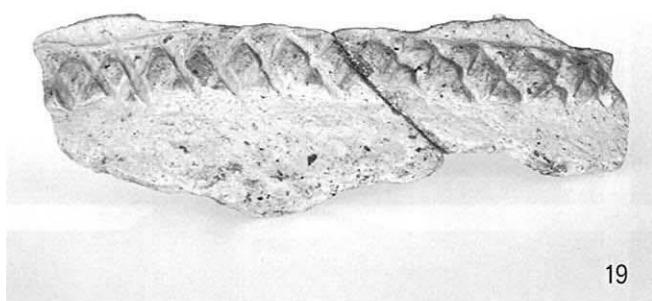
35



17



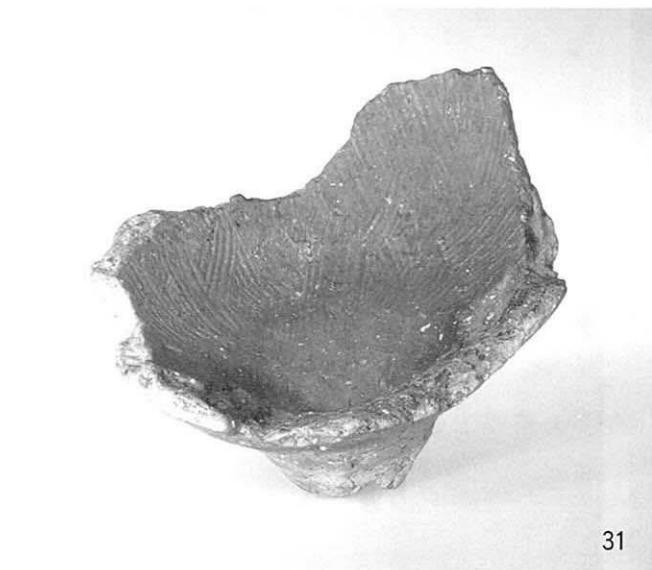
41



19



45

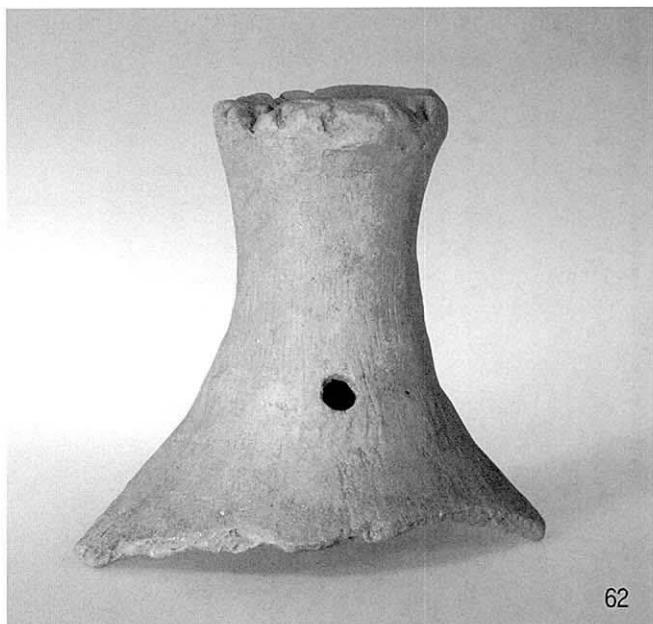


31



55

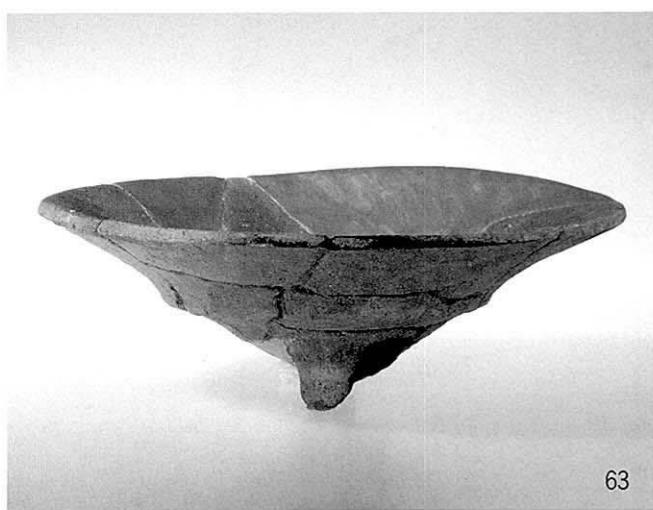
図版 8



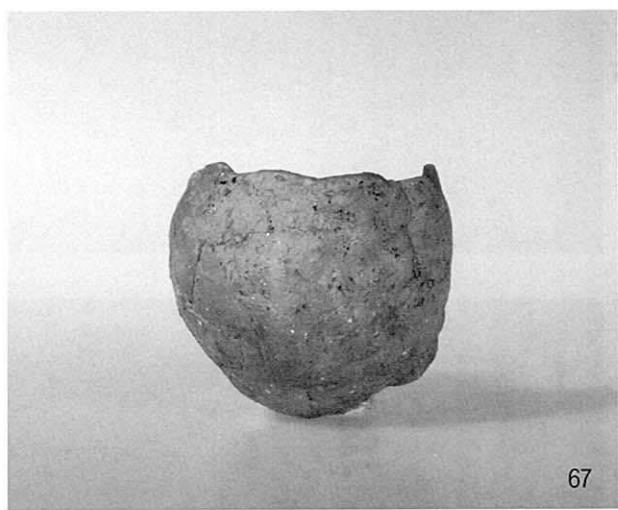
62



65



63



67



64



69

出土遺物②



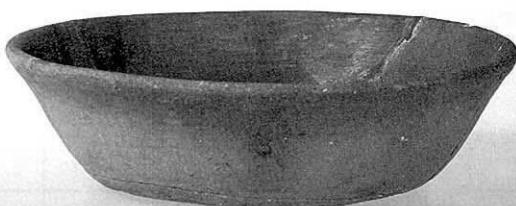
70



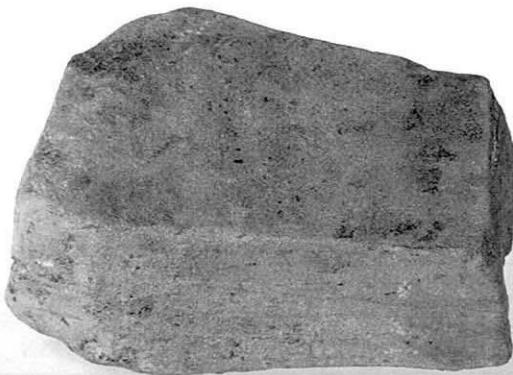
73



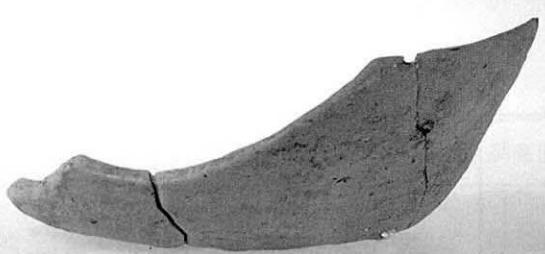
71



74



72



75

出土遺物③

報告書抄録

大野城市文化財調査報告書 第94集

榎町遺跡Ⅰ

平成23年3月31日

発行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 山口印刷株式会社
伊万里市二里町大里乙3617-5